

伊能忠敬研究

二〇〇四年 第三七号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国艦会図書館蔵
伊能大図一一五号の部分「熱田から名古屋」

第四次の東海・北陸沿岸測量と、第五次から第八次測量までの西國測量の測量線は、全てこの地域を通りている。遠尾平野が交通上の要衝だったことを思い知らされる図である。南部から延びる測量線は灰色を伴っているが、これは当時、海岸が砂州だったことを示す。河川の流入部分が克明である。伊能隊は川の流域は測らなかつたので枇杷島川、万場川の流れなどは、絵画に過ぎないが、街道が横断する部分の川巾は正確に測つてある。熱田宿は船着場に面するが、ここに☆印があり、天測をおこなつたことがわかる。東海道の旅人は熱田から桑名まで船に乗るが、伊能隊はそうはいかない。海岸線を南下し、庄内川、万場川の河口を横断した。熱田から尾張徳川家居城の名古屋城との間は、当時でも人家が違つていて、一方いま市内の笠寺、八事は遅かな郊外だった。

(渡辺)

(題字は伊能忠敬の筆跡)

最新情報

大地みらいに伊能測量記念柱が誕生
伊能大図214枚がそろう

測量最東端の地ニシベツをゆく
伊能大図の欠図四枚の発見まで
鉄路の無い三日間

最後の四枚発見
測量最東端の地ニシベツをゆく
伊能大図の欠図四枚の発見まで
鉄路の無い三日間

話題

外国の文献のなかの忠敬先生 (二)
柏木隆雄さんが作詞 佐原香取中新校歌

「伊能大図」つながつた
研究会との出会い 思い出あれこれ

伊能忠敬記念館だより 伊能淳氏に紹介褒章
芳名録より

研究ノート

伊能古文書教室『旗門金鏡類録』(四)
交際範囲が広く人望の厚かつた忠敬

伊能忠敬書簡紹介(二)統「大川治兵衛宛」
渢川家と養子景祐の家族

地域史料紹介

品川より六郷川手前迄の図
伊能忠敬日記(六)

新潟支部便り・フロア展へ活動開始
九州支部便り・佐世保、島原の忠敬測量
日々の話題から 塩の道ウオーケー

お知らせ
忠敬石像が建立ほか
事務所が地図センターに移転

		編集部	編集部
前田	幸子	新沢	義博
渡辺	一郎	一四	二二
福田	弘行	一六	九七
秋間	実	二〇	
朝日	新聞	三九	
大沼	見	四五	
伊能	橋雄	四六	
伊能	陽子	二八	
小島	一仁	二四	
佐久間達夫		三〇	
安藤由紀子		三五	
伊藤	栄子	四〇	
植田	浩一	四八	
佐久間達夫		五六	
垣見	壮一	六二	
中富	道利	六三	

「大地みらい」に伊能測量記念柱が誕生 北海道・別海町

一本松に記念柱

イラスト・別海町福原義親さん



伊能忠敬の功績をたたえる記念柱の除幕式が7月15日快晴の別海町で行われた。同町は忠敬が測量のため訪れた最東端で最終到達地。除幕式には多くの町民に伊能忠敬研究会員25名など関係者が参加、記念柱の完成を祝った。

当日の朝5時のNHK-TVからは今日の予定として札幌局から全国向けにこの催しの紹介アナウンスが流れていた。

撮影から。後方はとうとうと流れる西別川。まもなく鮭が遡上する。本別海西別川河口一本松にて

除幕式会場で記念撮影から。後方はとうとうと流れる西別川。まもなく鮭が遡上する。本別海西別川河口一本松にて

西別川河口で除幕式

歴史に残る業績を後世に伝え、忠敬の測量にとっては記念すべきこの地に、記念碑の建立を進めてきたのは地元の「伊能忠敬記念碑建設期成会」で、16日から開催される釧路での「伊能大図フロア展」に合せ計画をしてきたもの。会長で伊能研究会員の丹羽勝夫さんが有志に呼びかけて立ち上げ、準備を進めてきた。高さ2・3メートル、幅50センチのカバの木に

「第一次伊能忠敬測量隊最東端到達記念柱」と刻まれ、忠敬が1800(寛政12)年9月に、西別川河口に到着したことが記されている。筆は同町で酪農を営む大関美枝子さん。伊能忠敬研究会は創立10周年を迎えて、記念事業として建立に協力。



一本松の入口が300mに入る



ニシベツを歩こうふるさと裏見発見
伊能忠敬測量記念ツォーク
記念行事の一環として、別海町本別海で行われたウォーキングには、町民や小学生約60人が丸二水産番屋に集合、根室海峡を右手に望みながらゆづくりと北上し、忠敬が測量した約2・9キロを西別川河口を目指し歩いた。ちよんまげに着物姿で忠敬に扮した先生が先導。別海小学校の児童たちも、当時の測量に使われたとされる手づくりの道具を手に、ウォークに挑戦した。

神主さん、報道陣の待つ除幕式会場に到着。西日好天、気温24度

先頭には御用旗が行く



除幕披露と記念植樹

カバの木に「第一次伊能忠敬測量隊 最東端到達地点記念柱」と彫られた柱が除幕披露された。

丹羽勝夫期成会会長は

「伊能忠敬は日本地図製作のため全国を測量しています。北海道は伊能忠敬が行った十回の測量旅行の中でも記念すべき第一回目でした。一八〇〇年閏四月十九日から十月二十一日までの一八〇日間、三、二三四キロの徒歩測量旅行の最終到達地は、北海道東部ニシベツ(現・別海町本別海西別川南岸河口一本松付近)でした。そしてこのニシベツが伊能忠敬の測量した最東端となりました。

超人的な努力で日本の地図を作成した伊能忠敬の業績を称えるとともに、到達した最東端の地に記念碑を建立することは、大いに意義あることと考え、関係団体と連携しながら期成会を組織し活動を行ってまいりました。将来の本格記念碑建設に向けて、皆様の暖かいご指導・協力をお願い申し上げます。

今日は別海の歴史的文化財を築く一頁を記すことが出来ました。町

関係者と小学生で除幕された



観光協会はじめ多くの方々の支援に感謝します」と挨拶。

渡辺一郎代表は「この地までの第一次測量は自費で行われました。この成果がのちの全

国測量という大事業になります。江戸幕府を動かした

第一歩の努力を称え、ここに記念柱を建立することはたいへん意義深いことです。地元の関係された皆様にこれまでのご努力に感謝いたします。

佐野力三西別町

長は「伊能忠敬の足跡を町の誇りとしたい。ここは河川敷なので記念碑の正式認可までに

は時間が必要。今日の木製の柱はいつの日にか立派な記念碑に」と本格的な記念碑建立への思いを語った。

裏面の文言 伊能忠敬再発見

伊能忠敬研究会創立十周年記念
寛政十二年（一八〇〇）閏四月五五

歳の伊能忠敬は若者五人とともに江戸深川を出発し、一〇七日かけて一、六一二キロを歩測し、この地まで到達天体観測をおこないました。

一〇〇四年七月十五日

伊能忠敬研究会
別海町伊能忠敬記念碑建設
期成会 建之 大関香勝書

記念柱の解説文

千葉県佐原の人、伊能忠敬は四十九歳で長男に家督を譲り隠居しました。隠居後、曆学や天文学を修め、當時不明だった地球の大きさ、つまり緯度一度の距離の計測を意図しま

す。当時北海道周辺にはロシア船が出没し、騒然としていましたから、北海道の正確な地図を作成するという目的もありました。

ニシベツ到着は一八〇〇年陰曆の八月七日、現在の暦では九月二十五日です。折から浜では徳川将軍家へ献上する鮭漁が盛んで、船の手配ができませんでした。このため、ネムロ・クナシリでの測量を断念し、この地で最後の測量をして引き返しました。

以後、伊能測量隊は一八一六年まで日本全国を十次にわたり測量し、「大日本沿海輿地全図」が完成したのは伊能忠敬死後の一八二一年でした。ニシベツは十七年十次に及ぶ伊能測量の最東端であり、聖地ともいふべき地であります。

ここに、記念柱を建立し伊能忠敬の偉業を偲ぶとともに測量を行つた最東端の地を後世に伝えるものであります。

一〇〇四年七月

伊能忠敬研究会
別海町伊能忠敬

記念碑建設期成会

本別海一本松
町の指定文化財になつてゐる。グ
イ松で推定樹齢130年。明治7年東
北各地から漁夫百数十名を募集し、
西別川において漁撈に従事させた本
柳田の番屋の祠の横に植生したもの

別海町伊能忠敬記念碑
建設期成会のみなさん(敬林館)
顧問 吉川 新一
会長 丹羽 勝夫
幹事 磯田 忠雄
幹事 大橋 勝彦
幹事 福原 義親
幹事 村岡 洋美
事務局長 川村 俊也



撮影・福原義親さん(別海道立)

で、二、三本あつたが現存する唯一
の一本であり、別海町発祥の地の本
であると案内板にある。

別海は日本離れた雄大な景色

車窓は北海道の雄大な景色が広
がる。たしかに真っ直ぐな道が長く
続く。広い平野の先には地平と空の
区別が見えない。ジュウタンのよう
なやわらかなウエーブ状の緑の牧草
地には牛が点在する。海から切り立
った崖から盛り上がりてくる海岸線
の景色。台状になつた大地には、牧
草が青々と茂り、ところどころ疎林
が地平を画して風に揺れている。眼

前に根室海峡が広がり野付半島越し
に国後島まで14キロ。
別海町は地平線を感じに来ない
か!と呼びかけ、大草原の町、自然
が作り出す色彩と造形の町をつたう。

忠敬の測量日記から

九月七日 朝より四ツ頃まで霧深し。
それより晴天。朝五ツ後出立。川舟
三里余フウレントウ。一里弱。それ
より草原平地十町ばかり行き海岸に



広さ1320平方メートル。十勝の足寄

町に次いで全国2番目の広さ。この
面積は大阪府や島根県の大きさに近
い。根釣原野を開拓し、町民は1万
7千人余りに対し12万頭の牛がい
る。牧草地面積は日本一である。酪
農と根室海峡に面した漁業の町であ
る。人家は10ヶ所に集中し、町内では
は隣家まで12.3キロあるところもあ
るという。アイヌ語でベツとカイユ
は「川の折れ曲がつていて」の意味

だそうだ。

「広大な牧草地を利用し、牛の餌も
すべて町内で自給している。アメリ
カ産の穀物飼料などは一切使わず、
健康な牛から安全な牛乳を供給して
いる」という。「別海の牛乳屋さん」
ブランドで「別海の安全でおいしい
牛乳」の全国販売を展望している。
後でこちそうになつたアイスクリー
ムと牛乳はとてもおいしかつた。

出、二十七町余ニシベツに九ツ過に着。仮屋に止宿。此所不残仮屋なり。夜晴測量す。

西別川両岸には深く木々が枝を垂れ、重く淀む川面にその枝影が落ちる。その景色は日本離れしている。ここで忠敬さんはこれ以上の蝦夷地測量を断念するに至る。

ネモロ御詰合御勘定大嶋栄治郎殿、御普請役井上辰之助殿、同勤方村上治郎右衛門殿、此所へ御出役なり。

ネモロへ罷越候儀を伺候所、當時鮭引綱最中にてネモロより不残此の方へ引越候間、ネモロ会所には人なし

一、人足 七人
ニシベツよりアツケシ迄

右は我等儀 蝦夷地測量御用相済

明九日ニシベツ出立。その他へ罷越候間、書面の人足、御定の賃錢、請取之聊無滞滯渡海止宿等の儀、是又差支無様執斗可給候。

甲八月八日 伊能勘解由 印
惡消支配人中

星太陽を測、星後より十間繩を以、クナシリ、ネモロ外所の方位を測候間、明八日逗留、九日に出立候様帰可御挨拶申上げ人足並びに渡船の儀を願候所、アツケシへ迎船を申遣候間、明八日逗留、九日に出立候様被仰候間逗留。八ツ後よりクナシリ島、ネモロその外方位を測る。

同 九日 朝より夜迄晴天。朝五ツ夜は薄雲。

忠敬さんが到着したときは新暦で9月25日である。鮭漁で忙しく測量の手伝いは出来ないと援助をことわられたがなるほどこの時期は漁民にとつては超多忙の時期だつたろう。

最初の献上鮭の時期だつたのでこれ以上前へ進めなくともやむを得なかつた。

同 八日 朝より晴天。此朝御詰合

並支配人より飛脚を以アツケシへ我等出立に付迎船の触を出す。此方より先触を出す。

覚 封紙 先触

獻上西別鮭

別海漁業協同組合では献上鮭について根室市史からこう紹介している。西別川を故郷とする鮭を西別鮭と称し、天明五年（1785）にはその名声はすでに江戸まで広がっていた。

西別鮭は今でも有名であり、長く

献上鮭としても知られているが、将军への献上として史上に出てくるのは「休明光記」であり、寛政十二年（1800）のこととされる。戸川安倫の命によるものであるが、その年納戸頭格であった戸川は東蝦夷地巡察を命じられて国後まで行くが、帰路西別川で塩引鮭にして持ち帰つて献上した。その後、次のように献上すべき旨の達しがあつたというの

前ニシベツ出立。海辺二十七町、原と野地十町ばかりフウレントウに到。

ニシベツ産、塩引鮭 七十尺
年々十月頃十三尺、

十一月頃四十尺可相廻田

と三品は寛政十三年酉年正月、乗船一里余行でウレン川を三里余乗

てアンネベリに七ツ半後に着 道法五里。止宿。

…江戸には 10月21日に帰着。
〔佐久間達夫氏・伊能忠敬測量日記〕

以上三品は寛政十三年酉年正月、御用膳番より申立のよし、出雲守穂周朝臣より達せられる。(注)尺は鮭の単位、本。以上三品とはこのほかにシノリ産の昆布と數子があげられている。

戸川は享和二年（1803）蝦夷奉行の設置に伴つて羽太正養とともに奉行なるが、当時は納戸頭取格といふ役柄であり、御用料として鮭を見る目もあつたのである。この献上鮭の製造、取扱いはまことに厳重であり、根室詰所の重要な行事として行われた。勤番の者は麻上下で立会い、箱詰め、封印で江戸に送られた。

文化五年（1808）の「根詰場所様子大概書」によれば、「中にもニシベツは最も魚に富、年々献上の塩鮭も同所にて仕立、年内江戸表へ相廻候也」と記されている。江戸の例が盡職島にある会所に直送されたもので幕末まで続けられた。

西別川は世界一の透明度を誇る摩周湖の湖水がいつたん湖底に浸透し、

西別岳のふもと、虹別で地表に噴出するのを源としている。河口まで約78kmの流域を豊かに潤しながら悠々と流れている。

高師小僧

西別川の鮭がなぜそれほど美味なのか。その理由のひとつとされているのが、西別川の川底に無数に存在するといわれる高師小僧である。褐鉄鉱の一種で、地下水に溶けていた鉄分が地中の植物の根の周りに水酸化鉄として沈着してできたもの。この高師小僧と世界一の透明度を誇る摩周湖の伏流水との相乗作用で西別鮭を日本一美味な鮭としている。

高師小僧を広辞苑では「管状・樹枝状の褐鉄鉱。鉄分が地中の植物体のまわりに付着してできたもの。愛知県豊橋市高師ヶ原、その他各地に産する。その形が幼児・鳥などを想像させるためこの名がある」と。

忠敬さんは

ニシベツ川を渡ったのか?

二年前、平成14年7月8日の釧路新聞に期成会顧問・吉川新一氏の「夢ふくらむ忠敬の足跡」が掲載さ

れている。吉川さんは別海町文化財保護審査会会長。以下紙面をおつてみよう。

さて、別海町にはかつて西別(ニシベツ)と呼ばれた地域は二ヶ所あつて、一つは現在別海町、常盤町、別

海西本町、別海宮舞町など九ヶ所の町内に分かれた旧西別。もう一つは西別川の河口で、川南を西別(ニシベツ)と呼ばれた地域で、川の北側が別海である。

これらは昭和46年4月の町制施行に伴って翌47年1月区画整理による新字名番地施行によって消滅、本別海に包括されてしまつて、その西別(ニシベツ)は永遠に残つてこない。この本別海となつた西別まで伊能忠敬は三百年前に測量のため足を踏み入れていた訳である。

アメリカ大図にはうつすらとだが西別川河口に☆印が見える。この川を渡つたところで天測をしている印である。それを見て吉川さんは喜んだ。というのはこの地に伊能測量の記念碑をという希望がある。○印のところはへんびな所で出来ればみなさんに来ていただくならもう少し

よい場所が良いと思っていたが、今度の地図で☆印がみつかりここなら良いと喜んだそうだ。ひとつの記念碑が建立されるまでには地元の郷土史家のこのうえないと苦労をかいまだ見る思いである。感謝しかり。

一本松で町の定点観測を

ここ自然豊かな別海町には立派な図書館、郷土資料館に加賀家記念館がある。「今まで自然に向かい懸命に生活の基礎を牧畜と漁業で築いてきました。ようやく先祖や地域に目が向くようになったのかもしれない



別海町図書館、郷土資料館、加賀家記念館が並ぶ

せん。郷土の良い面を次の世代に残せたら。以前地元の方から伺つた。すばらしい測量記念柱が建ち、別海の魅力がまたひとつ増した。一本松から発信される情報では定期観測として追つてみたい。

上の白い貝殻はニシベツ川河口のもの。その下のケースには今回記念にいただいた河口の砂と本文にある高師小僧。左の輪



切り丸太は別海町森林協同組合福祉施設スワンの家の協力でカラ松の間伐材から作られたコースター。海の幸と森への感謝が息づいている。

□別海町ホームページ http://www.aurens.or.jp/

□別海漁業協同組合

TEL: 01537-5-8176

魅る浜に輝く記念柱

(福田弘行)

釧路で二万二千人余に全国大図がお披露目
徳川将軍でも見られなかつた

伊能大図214枚がそろう

書」と忠敬直筆の測量日記下書きが展示された。これは主催団体のひとつ日本地図センター野々村理事長と伊能ご夫妻の配慮によるもの。



7月14日夜NHKニュース10に渡辺代表が

釧路で「214枚勢ぞろい伊能大図」に出演した。NHKの取材要請に応え、研究会の旅行日程を早めて先に釧路へ来たもの。14日に到着した大図は梱包を解かれ、会場の釧路市観光国際交流センターに並べられた。何しろ一枚が畳一畳の大きさなので一枚一枚を繋げて合わせるのがたいへん。さすがは現代の技術陣、地元の測量会社がパソコンを使い、5時間後には見事に214枚がフロアに並んだ。テレビで渡辺代表は大図と忠敬を紹介し「伊能大図を並べて見てもらうのがいちばんわかりやすいんじゃないですかね」と来場を呼びかけた。

「アメリカ伊能大図里帰りフロア展」・釧路

16日は開会式。伊東良孝釧路市長、渡邊国土地理院長に続いて伊能洋さん「忠敬本人にも見せてあげたい」と大図への思いを語る。白糠小学校の生徒達は地図を熱心にのぞき、精巧さに感心していた。
この会場では幕府が伊能測量を許可した書状「蝦夷地測量御沙汰

2万人を越えた入場者

その後の報道によれば入場者は16日2,659人。17日5,038人。18日は正午すぎ、早くも目標の1万人の大台に。ちょうど1万人目の幸運な来場者に記念品を贈った。井上実行委員長も「こんなに早く突破するとは」と同展の成功に手応えを語る。同日は6,729人に。最終日の19日は8,313人となり、4日間で22,739人が来場。主催者予想を2倍以上上回った。映画「伊能忠敬ー子午線の夢ー」は9回上映され971人が鑑賞した。別海町のみなさんもたくさん参加されていたが釧路市の人口は18万8千人からするところの入場者数はすごい。関係者のご努力に感心し、お祝いを申し上げます。



地元の大学生達の開会式演説



関係者によるテープカット

「伊能大図」214枚が到着 壮観



あすから釧路で初公開

金川 足各 桑千 幕内
平成16年(2004)7月15日(木曜日)

中央の四国あたりに座って話している一人は渡辺代表とNHK創設

放送局の宮本記者。ニューステンの取材を受ける。

「伊能大図」上を歩く

鉄路で
初公開



16日オープンした「伊能大図展」。開場と同時に人であふれたフロア

多くの来場者
キメ細かな
測量に驚き

子孫交え忠敬像が語られる

17日は全日空ホテルで講演会が開かれ、渡辺代表が「伊能大図は興

17日は全日空ホテルで講演会が開かれ、渡辺代表が「伊能大図は興味津々」、国土地理院の海津優氏は「釧路の地殻変動は興味津々」を語る。続いてシンポジュームでは「伊能の歩みはまだ続く」がテーマ。渡辺、梅津氏に伊能陽子さん伊東釧路市長を交え、野々村氏の進行で忠敬の偉業や二百年前の地名について興味ある話題が広がった。

釧路の熱い三日間

前田幸子

敬が睨みし海の霞かな」という石碑を建てたいと思った。

明るい陽光が降り注ぐ原生花園の中のフランコード通り抜け、丹頂の親子や野生のエゾシカが草をはむ原野を窓外に見やりながらバスは渋滞のない道路を快適に走った。野付半島に立ち寄り、南下して別海町の記念柱除幕式へ。

研究会主催の第三回旅行は「釧路・ニシベツの旅二泊三日」であった。伊能大図二一四枚を一挙に公開するという本邦始まつて以来という展覧会のオープニングに立ち会い、また伊能測量の最東端ニシベツを訪ね、かつ到達記念碑の除幕式に出席するという。忠敬先生の偉業をしのび顕彰する研究会の創立十周年記念旅行にふさわしい企画である。かねてより西別を訪れてみたかった私はイの一番に申し込み、その日を首を長くして待つた。

七月十五日。朝7時、紺地に白く染め抜いた御用旗のもとに集合。羽田空港から1時間半で釧路空港に降り立つ。猛暑の東京とはちがい、風が肌に涼しい。空港からまずはオホーツク海を望む国後展望閣に向かう。バスは青空とゆるやかにうねる牧草地眺めながら東に向かってひた走つた。釧路バスの小林ガイドさんは伊能忠敬の事績について名調子。実は昨晩伊能忠敬について一夜漬けで猛勉強した成果とか。その本がたまたま渡辺代表理事の著書だつたというのがご愛敬であつた。

「知床旅情」で「遙かクナシリ」と歌われるが国後島は思つたより近くに見えた。夜には島の灯火も見えるという。忠敬先生は鮭漁のため舟と人手の調達ができず、ネモロ（根室）とクナシリ（国後島）は遠測して終わつた。はるばるこの地まで歩いてきて、人手不足のため測量をあきらめなければならなかつた忠敬先生。（秀吉ならぬ）忠

原野の中に笠を伏せたような枝振りの立派な松が、その脇に紅白の幔幕をめぐらして祭壇がしつらえている。ちかくニシベツ川の河口があり、空にはカモメが舞つてゐる。ここが、忠敬先生が測量に訪れた最東端の場所である。除幕式は伊能測量隊に扮した小学生の一団が可愛いらしく到着。午後3時半、報道各社のカメラに取り囲まれながら地元別海神社宮司によるお祓いから始まる。カッコウの声だけが聞こえる静寂のなかに宮司さんの伊能忠敬の事績を讀める祝詞の声が流れた、別海神社の越智宮司は釧路原野の大狸の精が白装束を着たかのような見事な風貌。式典後の挨拶で学生時代に測量事務所でアルバイトし、測量とは浅からぬ縁があると話した。子どもの頃より伊能忠敬の伝記を聞き尊敬していたこと、今日このように除幕式で祝詞を詠むことができて感激で涙が出てきたこと、神社の育宮を明日に控え、忙しくて祝詞をじっくり書けなかつたのが心残りであることを語られた。しかも式後「来年は忠敬の生誕二六〇年に当たりますが、研究会ではどんな行事を考えておられますか」と問われて私をあわてさせた。この方も熱心な忠敬ファンなのだつた。

お祓いのあとは除幕である。来賓や測量隊の小学生が一気に綱を引くと「第一次伊能忠敬測量隊 最東端到達記念柱」の標柱が現れた。記念碑建設期成会の会長は丹羽勝夫さんという方。「測量日誌」に「丹

羽（金助）氏はこの場所（アツケシ）に留まる」とあるが、あるいはこの「丹羽氏」の子孫か。

ひき続いて祝賀会がこの丹羽氏の經營する別海温泉ホテルで行われた。カーリング場という体育馆のような広い屋根付きの場所に、炭火をあかあかとおこして豪快に魚介類の炭火焼き。真夏に炭火焼きとは涼しい北海道ならではのもてなしであるが、今年の北海道は気温が高い。カーリング場は炭火の熱と記念碑建立有志の熱意でむんむんしていた。

別海町での歓待に感激しつつ、釧路市長主催の歓迎会に出席するため釧路に戻る。草原のむこうに明るい茶色の夏毛をまとったエゾシカが遊んでいるのをみながら夕暮れがせまる原野をひた走り、幣舞橋を渡つて宿舎釧路プリンスホテルに着いた。着後そのまま同ホテルで開催されている歓迎会に出席する。伊東釧路市長をはじめ、来賓の方々それぞれのお人柄がじみ出でてお話をとても暖かい。北海道の大地のような開放感とさわやかさを感じた。また釧路の方々も私たち伊能研究会の存在感に何らかの感慨を感じられたようだ。渡辺代表理事がメンバー各人を紹介する言葉に興味津々聞き入っていた。「いやあ、圧倒されますな」「女性が多いですね」また伊能洋さんが挨拶に立たれたときには「おお、雰囲気ある、ある！」という声が聞こえた。忠敬先生の風貌をよく伝えていくという感動が混じつた驚きの声であろう。実は私も初めて伊能洋さんにお会いしたとき、切手に描かれた忠敬先生によく似ているので驚いたのだった。北海道は本州などに比べて神社や寺、史跡といった歴史を感じさせるものが少ない。釧路の人々にとってふだん触れる機会が少ないのであろう日本の歴史や研究会のパワー

一を感じさせて第一日目が終了した。

翌十六日は宿舎ホテル近くの「観光国際交流センター」で開催される「伊能図フロア展」のオープカットと展覧会。式典は音楽演奏も伴いマスコミ各社のカメラが並ぶ前にぎやかに執り行われた。フロア展はオープン早々多くの人々が入場し出足好調。「土別から一〇時間かけて来ました」という熟年の男性が「感激です」といつて渡辺代表理事と記念撮影。また三十代くらいの男性が連れの友人らしき男性に「二〇〇年前だぜ。すごいよ！」と興奮気味にささやいている声が聞かれ、白糠小学校の児童らが大勢伊能図の上にしやがみ込み白糠の文字をつけようとする姿やロビーで歩測の練習をする姿が見られた。

来賓の一人である在札幌米国総領事アレック・ウイルシンスキー氏に伊能図の感想をたずねて見た。「とてもユニークな地図ですね。非常に細かく書いてある。足で歩いて作ったなんて信じられません」と英語混じりの日本語で答えてくれた。また昨夜の歓迎会でひときわ心に残る来賓挨拶をくださった古谷達也氏（元釧路市助役、「釧路地方の地名を考える会」会長）に「釧路や別海の方々のお話はとても暖かい感じがします。なぜでしょうか」と問うたところ、「北海道の人には道外から来た人をもてなしたいという心が基底にあるからでしょうね」と答えられた。

この「伊能大図フロア展 in 釧路」には四日間で二万三千人の人が入場したそうである。これは釧路の人口や交通、地理的条件を考えると驚異的な数字ではないだろうか。釧路市のホームページは「感動の四日間」であったと伝えている。

フロア展見学後は忠敬先生の足跡を偲びつつアツケシ、霧多布岬等

を観光した。この日も昼は炭火焼き、夜は鍋物と熱い食事で北海道の海の幸を味わった。

翌十七日は旅行三日目で最終日。午前は釧路市内の和商市場で買い物。午後に行われる記念講演会とシンポジウムに参加するメンバーを残して多くのメンバーは釧路湿原と摩周湖などの観光へ。せっかくここまできたのだから講演など聞かなくて良いという渡辺理事の配慮だったが、結果的に講演会は席が足りなくなるほどの盛況だったということで観光にでかけたのは正解だった。

印象深かったのは阿寒湖に着いたとき。バスの前窓に掲げてある「伊能忠敬研究会」のプレートを読んだ通行人の男性が「ずいぶん高尚な会だなあ！」と大きな声をあげて通り過ぎていったのだ。この土地の率直な人々の声で自分がどのように見られているか自覚させられた。「伊能研究会」の名に恥じない活動をしていかなければと気持ちを引き締めた。

三日間の旅行中、道東地方は「霧の多いこの地方としてはこのうえない天気」に恵まれ、特に最終日は気温二〇度とこの地方の人にとっては「暑くてとてもやつてられね」（お土産屋のおばさん）というほど気候のなか、雄大な景色と美味しい食物を堪能し、また地元の人々の熱気に触ることができた。忠敬先生は全国に足跡を記している。この熱気はどの地域もひそかに保有しているのではないかと感じた。忠敬先生の御苦労を偲ぶロマンあふれる旅をすることができたことに感謝します。

（まえだ こうこ・東京都立大学勤務）



参加メンバー 後列左から 野田夫人 伊能陽子 堀江敏夫 成家淑子 前田幸子 平岡佳子 本郷靖枝 中山翠
新沢義博 大沼晃 伊藤栄子 今村恵二 井上靖子 長岡道子 金俊一郎 伊能洋 前列左から 福田弘行
野田茂生 石川清一 番取禱良 中川幸子 鈴木純子 渡辺一郎 齋藤サダ 坂本義の各氏(敬称略)

測量最東端の地ニシベツをゆく道東編

新沢義博

平成十六年七月十五日晴天。午前八時二十分武藏国羽田空港出立。
同九時四十分北海道釧路（蝦夷・クスリ）空港着。

今回は研究会創立十周年記念旅行会であり、目的は測量最東端地である別海町西別に建立される到達記念柱の除幕式参列と全国初の伊能大図展示公開の見学の二つである。会の旅行会は昨年九月の大坂旅行会以来であり、平成十一年に行われた千葉県九十九里・佐原旅行会を含めて今回が三回目となる。

今回は忠敬の功績を顕彰したと同時に二百年とさほど変わらぬ道東地域に残る原野の地を巡ることにより、忠敬も見た景観と共に見定めることができ、記憶に残る旅行となつた。

参加者は羽田空港集合の十九名と釧路集合の六名、計二十五名。多数の方が同地を訪れたのは初めてだつたのではないだろうか。三日間天気に恵まれ、梅雨のない涼しい北海道を満喫することができた。

一日目、釧路からまず向かつたのは国後島が見える標津へ。昼食場所の裏が根室海峡。その先に見える島影が国後島。北方四島ある同島の面積は沖縄本島よりも広い。さらに奥の国後水道をはさんだ抝捉島は国後島の二倍近くの面積をもつ。国後島に忠敬は渡つていない。同時期の探検家である問宮林蔵・近藤重蔵・最上徳内らは渡島している。太平洋戦争前までは日本人が暮らしていた。今でも日本人墓地が残る。国後島へはわずか十八キロの距離。島国に暮らす日本人にとって国境というものに普段あまり接することがない。知床半島より南の根室までは国内で数少ない国境を考えさせられる地域である。

最近、地元の人たちはロシアとの国境を「日露中間線」と呼んでいる。グローバル化は北方四島にも着実に進んでいる。

次は地理的に著名な野付崎へ。地形が鳥のくちばしに似ていることから砂嘴と呼ばれている。途中、車窓から丹頂鶴を見ることができた。

一行は測量最東端の地・別海町西別へ。西別はアイヌ語でサケが遡るという意味。バスから降りて徒步で会場へ向かう。現在当地は別海町本別海の町名になつていて。記念柱は町指定文化財の一本松の近くに建立されている。地元の小学生が江戸時代の服装をして、御用旗を持つて行進する場面も見られた。町長さんの挨拶、神主さんの祝詞が発せられ、研究会からは渡辺代表理事、伊能洋さん、記念碑建設期成会で研究会会員でもある丹羽さんらによつて除幕された。記念柱は高さ約二・一二メートル、幅約五十センチのカバの木に「第一次伊能忠敬測量隊最東端到達記念柱」と刻まれている。

当地に忠敬は一八〇〇（寛政十二）年八月七日（新暦にすると九月二十五日）に訪れている。『測量日記』には「朝より四ツ頃迄霧深し、それより晴天。（略）ニシベツに九ツ過ぎに着。」と記載されている。さらに北へ測量を試みる忠敬は鮭の漁獲のためこれ以上人足を確保することができず、いつたん測量を打ち切らなければならぬ決断をする。未開の地である蝦夷に足を踏み入れ心身共に疲れ果てていたであろう忠敬にとってこのニシベツの地はいかほどの見えたであろうか。この時はその後の本州以南の津々浦々にわたる測量をするとは思ひもよらなかつたであろう。第一次測量のゴール地であるニシベツの到達が伊能測量の第二のスタート地点になつたのではないかと強い日差しを浴びながらそう感じた。

式典終了後、町が催して下さった祝賀会に参加する。夜の根釧台地を走り抜け、宿泊地の釧路に到着すると今度は釧路市が祝賀会を開い

て下さった。市長さんはじめ市の関係者の方々、フロア展実行委員会の方々、アメリカ総領事の方からもてなしを頂戴する。

余談になるが道内にある忠敬関連の記念碑を述べたい。私の知る限りでは三つある。まずは函館山山頂にある銅版の碑。測量日記の一部と忠敬の顔が刻まれている。昭和三十二年に函館市が建立した。二つ目は福島町にある木製の角柱。こちらは忠敬が北海道に第一歩を踏み入れた地であり、一九九九年四月に「伊能ウオーカー」が到達したのを記念に建立された。三つ目は豊浦町にある測量二百年記念碑。難所である礼文華峰に豊浦町が同じく一九九九年四月に建立した。北海道をかたどった石碑に忠敬が測量した測線が刻まれている。「伊能ウオーカー」が通過する際に除幕式が行われた。また西蝦夷地を測量し北海道全図を完成させた、宗谷岬に立つ間宮林藏も忘れてはならない。

二日目。釧路市観光国際交流センターへ直行。一一四枚の大図を見学する。海上保安庁で発見された四枚の図も縮小させつつ展示されている。大図の原本は一八七三年の皇居炎上で焼失。国内には六十四枚しか存在していなかったが、二〇〇一年に米国議会図書館で発見された。大図の一枚の大きさは畳一畳分。全体での大きさは縦六十枚、横四十枚になるという。

さすが大図だけあって地名が立つた状態からでもはつきりと読み取ることができる。思わず北から南へ忠敬の測線に沿って、展示してある大図で日本一周することができた。北海道の知床半島は描かれていなかつたりして、見れば見るほど伊能図に吸い込まれる圧倒さがそこにはあった。

途中、開幕式・テープカットに参列する。同センターを出発する際、

札幌から高木さん、千葉県我孫子から土肥さんがお見送り下さる。元の地図に関心のある方が、鈴木さんに本のサインを求める場面も見受けられた。

その後は、観光コースを巡る。ラムサール条約に指定されている釧路湿原。忠敬が船で測量した厚岸。断崖絶壁の霧多布岬。和商市場で新鮮な魚介類を見学。年に数回しかない晴天に恵まれてしまつた霧のない摩周湖。足湯に浸かることができた川湯温泉。今にも爆発しそうな硫黄山。屈斜路湖畔で砂を掘るとお湯が湧き出してくれる砂湯。高速ボートに乗つた方もいたマリモが生息する阿寒湖。各々の移動時間は長かつたが、渋滞もなくスムーズに予定をこなすことができた。帰りの飛行機で離陸する際、釧路名物である霧にやつと遭遇することができた。

私にとっては「伊能ウオーカー」に参加した一九九九年以来、五年ぶり。学生の頃、オートバイで北海道一周して以来、数えて五回目の北海道であった。

当地の蝦夷地を測量に行つた忠敬はまさしく探検家でもあつた。北极星を追つかけた忠敬は、札幌にあるビール会社のシンボルマークである星同様、その足跡は今でも輝いている。本州では体感できないそのまましさを広大な地でじっくり味わうことができた一泊三日の旅行であつた。

引用文献

佐久間達夫校訂 『伊能忠敬測量日記第一巻』

山岡光治著 『訪ねてみたい地図測量史跡』 古今書院

(しんざわ よしひろ・元伊能ウオーカー本部隊、朝日販売開発)

伊能大図の欠図四枚の発見まで

渡辺一郎

あとは作戦であるが、公的機関から少し補助金を貰つておくと、個人の有志が調べたということより、発表のとき都合がいいので、日本国際地図学会と日本地図センターの御協力をいただいた。

二〇〇一年三月、夫婦でアメリカ旅行中に、伊能大図模写本二〇七枚を発見したが、これは全く偶然の出会いであった。当てがあつたわけではない。ワシントンのモールを見物していて、議会見学の長い列に並んでみたが、何時になるかわからない。あきらめて、向かいにあらる議会図書館を眺めながら、伊能図探しを思いついた。

この図書館に伊能図があるかないかわからないが、とにかく一応、探索しなければならないなという気になる。明日は図書館だと決めてホテルに帰る。

準備は全然してないが、ホテルでどういう地図を探しているというメモだけ作つた。それがドンビシャリ、模写本とはいながら大量二〇七枚も出てきたのである。幸運としか言いようはない。伊能忠敬ブームは大変な幸運に恵まれて、ここまできたのであるが、忠敬さんの御運はまだまだついているな、というのが率直な感じだった。

さてどうするか。どこかの新聞社にお願いして特種で記事にしていただくことはできると思うが、それではもつたいない。それに全図開いて調査せずに二〇七枚発見といういい加減な話はできない。

やはり狂牛病ではないが全数調査がいる。そして、私だけではなく伊能図について判断できる力のある方が最低もう一人必要である。二、三の方に当たつたなかで、会員の鈴木純子さんが自費でも行つてくれるという。鈴木さんなら問題はない。これで調査計画は成立と同じである。すぐ飛行機を確保した。

アメリカ大図に引き続いては、三四号、三五号が佐倉の歴史民俗博物館にあるだろう、という話が国土地理院の根本技官の指摘で、堀野測図部長（当時）から伝えられた。

この二枚は私の記憶のなかにあって、話を聞いたとき「そうだ、間違いない」と確信があった。拝見して確認するだけであるが、これも鈴木純子さんに御同道願つた。開いて見るとアメリカ大図と一連の図で、何らかの理由で分かれ別れになつたものだつた。

この図は秋岡コレクションの一部であつて、秋岡さんは市中から買ひ集めたといわれている。このことは、分からぬといわれているアメリカ大図の来歴に關係する事項であるから、今後しつかり調査の必要があるだろう。

歴博大図は調べにくくときから、発表手順を想定していた。確定後先方の担当の青山助教授に提案すると、すぐ了解してくれ、発表後、展示の段取りまでして頂いた。当日は各社の成田支局から多数お出でになり盛大な発表で、歴博の館長以下大変驚いておられたことを記憶している。

富士山の南の一〇七号が国立国会図書館にあることは、国会大図四枚の発見者である鈴木純子さんが前から指摘していたことで、特に発表という話ではなかつた。

それで、残りはあと四枚となる。発見から博物館展、フロア展の具

体的な段取りは、それぞれ分担にしたがい、組織されたグループが実行するわけであるが、途中では色々なことが多々起つた。つぶれかかったこともある。

そういう中で、お金も、要員も派出できない伊能忠敬研究会代表が事務局長として諸作業の進行を推進するのはなかなか大変なことである。はじめ就任するときは、名前だけと云うことだったが、どうしてどうしてそうはいかず、重大な局面の調整に多くのエネルギーを費やした。

尤も、伊能研究会の会員で、フロア展の実行委員長を引き受けておられる方が二人おります。新潟の実行委員長の小林さん（元新津市長）と福岡の実行委員長の石川さん（元損保代理店役員）です。本当にご苦労様です。御健闘を心からお祈りします。

話を戻します。スタートの神戸市立博物館の開幕式に鈴木純子さんと出かけて、「いよいよはじまるね」。ここからは展覧会は自動的に進むから気になることはないだろう。といいあつたなかで、ふと、しかも四枚の欠図のどれかが、海上保安庁海洋情報部蔵の伊能図模写図のなかにあるかもしれないと思い付く。

鈴木さんも「当たつて見る必要があるわね」ということになり、鈴木さんにアボイントを依頼する。目録を見た限りでは、どういうものかは、分からぬが一二号の宗谷と一三三号の京都がありそうなことは推測できた。当日は、海洋情報部の企画課測上専門官の所にお邪魔して見せていただいた。

第一二号 宗谷

問題なく欠図の一枚。朱の測線がないこと、着色がないこと、山景の描画がケバ式だが、欠落は埋まりそうだった。

第一三三号 山城、河内、攝津

縮小率が小さいようであるが、間違いなく山城、河内、攝津の図であった。風景は黒一色であるが、測線は朱で、宿場○天測地☆も朱で示す。京都、伏見、淀などの町並みが精細で、社寺などを細かく記す。京都という著名地域を含む大変貴重な図であった。

第一五七号 備中、備後福山

着色されていて最も伊能大図のイメージに近い。目録では無題となつていて、まさかとおもつたが、地域的にはまさに欠落している福山付近だった。

第一六四号 備後安芸、伊予今治

この図は海岸線のみで、描画の内容が貧弱なため、周辺と接合できるかどうか不安であったが、フロア展示では接合できていた。もつとも、中国地方内陸部は描かれていないので隣とは合わない。

欠図の四枚が一度出てきたのには、びっくりした。これは大ニュースだ。報道発表してもらおうと、測上専門官にお話したが、なかなか意義が御理解いただけなかつた。世界でこの四枚しかない貴重品だね、ということだけを、納得してもらい、地理院のトップ経由でお願いするから、幹部に上げておいて欲しいと依頼して辞去した。
帰路、大阪に出張中の国土地理院の矢口参事官を呼び出して、連絡する。「それはすごい。すぐ海洋情報部長に話しする」とのこと。日本地図センターの野々村理事長にも、海洋情報部長を知り合いだと思い、働きかけを依頼する。

このあと、矢口参事官は担当官を連れてすぐ四枚の地図を見にいつていただき、伊能忠敬研究会としての発表。釧路の全国フロア展に間に合わせること、などが決まり釧路展の大盛況につながつた。

「伊能大図」最後の四枚発見

大図の全てが明らかに

近年の調査により、全 214 面から成る最終本・伊能大図は、アメリカ議会図書館、国立歴史民俗博物館（佐倉）、国立国会図書館などに模写本として 210 面現存することが分つているが、残り 4 面の所在は不明だった。

このたび海上保安庁海洋情報部所蔵の伊能大図模写図を調査したところ、4 面すべてが含まれていることが判明し、伊能大図の全容が明らかになった。7月1日午後2時から東京・築地の海上保安庁海洋情報資料館で渡辺代表理事並びに鈴木純子氏より報道発表された。

発見された四枚の大図

海洋情報部が旧海軍省水路部から引き継いだ資料の中に、伊能大・中図の原寸模写 6 面、大図の縮小模写 141 面がある。明治 10 年に海軍省水路局が海図制作の参考用に作った模写図をほぼ同時期に業務参考用に再度転写したもので、もとになつた

本来の模写図は関東大震災で焼失し、転写図だけが難を逃れたものである。描画形式は伊能図のような鳥瞰図式ではなく、ケバ式（通称・地図で山の形や傾斜を示すのに細い楔（くさび）形の線を用いたもの）に改めたものや、着色のない図が多い。

この模写図群の存在は從来から学会誌等でも報告されたおり、整然と保管されているが、完全揃いでないことが、描画形式が異なり、縮小されていることなどがあつて、大図の欠図をこの模写図群のなかで探索する



記者会見・海上保安庁にて

る動きはこれまでなかつた。今般、海洋情報部の資料に基づき詳細に検討した結果、形状は他の大図とはかなり違つてゐるが、現在欠図となっている部分 4 面に相当する縮小模写図としてすべて見つかつたものである。

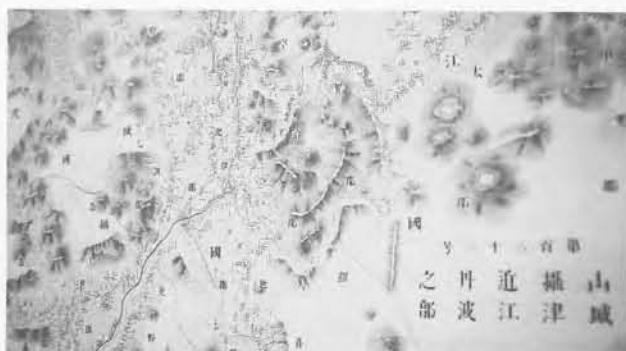
発表された四枚の大図

(一) 第12号 蝦夷宗谷

北海道の北端の宗谷付近。1/2縮小、無着色、地形はケバ式の表現。朱の測線が表示されていないが伊能大図の趣を伝えている。



(二) 第133号 山城 河内・摂津
大図全体を通しても貴重な1面。1/2縮小、山景はケバ式で彩色はないが、測線、宿場の○印、天測地☆印は朱で記載される。京都市内の寺社の記入などは詳細である。描画は丁寧、精細で、拡大が可能。若干の着色を加えれば伊能図のイメージを十分再現される。



(三) 第157号 備中 備後福山

目録では無題とあり探索中の欠図部分とは思われなかつたが、実際には157号の1/2縮小模写図だつた。山景に緑の着色があり、4面のなかでは最も伊能大図の描画形式に近い図である。



伊能図最終上巻本

「大日本沿海奥地全圖」という名称を付けて、忠敬没後二年余の文政4年(1821)7月10日に提出された大図214面、中図8面、小図3面が全ての測量成果を集大成した最終上巻図(最終本)である。国後島南部から屋久島までの最終的な元成品である。

各種伊能図は、いずれも刊行図ではなく、全て手書き地図として伝え

(四) 第164号 備後 安芸 伊予今治

157号と同様に無題とあり、予想外の154号の範囲を描く図であることは間違いないが、1/2縮小で描画面が小さく、完全な図かどうかは周辺の各図との突合せ検討を要する。



られているため、成立の経緯により、次のように位置づけすることができる。

・正本・幕府上呈本

・副本・伊能家に残された控え図や、諸侯への献呈図など、上呈本に準じて丁寧に制作された図

・稿本・副本として制作されたが何らかの理由で未完成のまま中断され伝存する図

・写本・江戸時代において原形保存を目的として手書きで複製された写し。忠敬在世中から地図の貸出しがされており、写本がおこなわれた。写本でも原本がよく、丁寧に写されれば、副本と変わらない。

・模写本・明治時代以降、原形保存のため手書きで模写された図

「最終本伊能図」の行方

上呈された最終本伊能図は、幕府の紅葉山文庫に保管され、明治政府に引き継がれたが、オーストリア万博に出品する日本全國の編纂用資料として、太政官正院地誌課に貸し出され、作業中の明治6年(1873)

に皇居の火災に遭い焼失したという。

しかしながら、日本の近代地図整備の資料として、伊能図活用がぜひ必要であったことから、焼失した最

終本に代わって、伊能家に残されたいた控図の借用、ついで再献上が要請された。これをもとに、内務省地理局、陸軍省参謀局、海軍省水路部などで伊能図の模写がおこなわれ、近代地図制作の基礎資料となつた。

再提出の伊能家控図は、内閣記録局を経て、東京大学図書館で保管されていたが、関東大震災に遭い、全部焼失したといわれている。このよ

うにして、最終本伊能図の正本と、

明治期に提出した伊能家控えの副本も全て失われてしまつたというのも定説である。これに対しても現在東京大学総合研究博物館に伝存する中図五枚は焼け残つた伊能家控え図ではないかと指摘する研究者もいる。

〔大図・模写本43面〕〔国立国会図書館 鈴木純子氏の発見〕アメリカ大図にない107号静岡・伊豆がある。
〔大図・模写本207面〕〔アメリカ大図〕

图

所在不明だった伊能図

所在不明は大図だけであつたが、アメリカ大図の欠図7面のうち3面は現存が判明しており、所在不明は12、133、154、164の今回判明された各号のみとなつていた。

〔アメリカ大図の欠図〕

今後の全国公開に向けて

国土地理院では、現在全国公開中のアメリカ大図展に、原寸に拡大複写して展示する予定。早ければ16日から釧路での公開を楽しみにしよう。

記者会見会場には在京メディアのカメラが並んだ。日本テレビでは2日、ズームイン朝でまとまつた報道

面) 東京国立博物館、ペイレ氏蔵、成田山仏教図書館

(三) 大図・副本 7面 169、173、175、178号

山口県文書館

四大図・副本 7面 191、192、201、204
～207号 平戸・松浦史料博物館

(五) 大図 模写本5面と2面 56、69、81、138、145と34、35号 国立歴史民俗博物館

歴史民俗博物館

〔大図・模写本43面〕〔国立国会図書

館 鈴木純子氏の発見〕アメリカ大図にない107号静岡・伊豆がある。

〔大図・模写本207面〕〔アメリカ大

能図の全貌が明らかになつたと考えられ。大図は特に精細であるから、200年までの日本の海岸線、地形、山河、市街地の発展の経緯、地震、火山や人々の営みまで推測させるものがある。

164 157 備中 備後福山 今回発見
備後 安芸 今治 今回発見

「これから」の伊能図

今回の発見は大図模写本そのものではなく、明治初期の海軍省水路局技術陣の創意が加えられているが、原形は伊能大図であることから、これにより214面の伊能大図の全図が揃い、大・中・小三種類の最終本伊能図の全貌が明らかになつたと考えられる。大図は特に精細であるから、200年までの日本の海岸線、地形、山河、市街地の発展の経緯、地震、火山や人々の営みまで推測させるものがある。

現存する副本・写本・模写本

(一) 小図・副本 3面 東京国立博物館

写本 4面 神戸市立博物館 東京

都立中央図書館

(二) 中図・副本 2点 写本 1点 各 8

面) 東京国立博物館、ペイレ氏蔵、成田山仏教図書館

山城 河内 横津 今回発見



がされていた。各地でご覧いただい
た映像はいかがでしたか。

新聞の東京最終版を集めてみた。
朝日が紙面を広くのせていて、1面
にガイドがあり、社会面の見出しあ
「伊能大図つながった」最後の4枚
発見。地図2面と列島位置図が
カラーである。読売は「伊能大図そ
ろつた」、東京は「伊能列島完全版」
でカラ一、日経は「伊能大図最後の
4枚判明」、産経は「1面ガイドに
江戸の日本地図現代に甦る」と。

毎日も1面ガイドから「伊能大図そ
ろう」とある。北海道新聞は自社取
材で「宗谷付近も地名詳細に」から
「宗谷付近の地図は、伊能忠敬がサ
ハリン（権太）探検で知られる弟子
の間宮林蔵に測量を依頼し、その結果
を基に製作したといわれ、現在の
稚内市を中心に宗谷岬などを含む
560km四方が描かれている。河川
や湖の名称を現地に住むアイヌ民族
などから聞き取り調査したとみられ、
「ノツシャム岬（現・野寒布（のしや
ふぶ）岬）など当時の地名も多数記
述されている」と詳しく報じている。

各社の報道では紙面容量に差があ
る。後の情報によれば、朝刊早刷り
では1面に大きく載せた新聞があ
ったようだが、外電が入りイラク特
別法廷の映像が配信されたため、紙
面移動や縮小があった模様である。
朝日記事ではアサヒコムの情報と
比べると次の表現が削られているよ
うだ。——現在、国土地理院などの
主催でアメリカ大図展が各地で開か
れており、今月16日からの北海道・
釧路市観光国際交流センターでは、
全214枚のレプリカを並べた展示が
実現しそうだ。渡辺さんは『まさか
4枚そろって出るとは思わなかっ
た。これで大・中・小図が全部そろ
い、ひと仕事終わりました』と感慨
深げだった。——

毎日では2日の記事縮小に対し
て佐藤由紀記者が7日の夕刊で欠
けた部分をコラムで詳細記事にして
いる。「伊能大図つながった4万
*200年前の列島全214枚一堂に」
と。記事の最後はこうある。——忠
敬は京都に長期間滞在しており、渡
辺さんは『測量日記と大図と照らし
合わせれば、さらに詳しい旅の模様

がわかる』と期待している。——
日経3日朝刊・文化欄 松岡編集委
員「70年前の東京鳥瞰」記事から。
▼海洋情報資料館 明治初期から海
事にかかわってきたのが今の海上保
安庁水路部だ。02年4月に海洋情
報部と名称を変更した。同部の資料
館には旧海軍省から引き継いだ膨大
な資料があり、99年から整理が始ま
った。約440図を対象とした今回の整
理作業だけで、東京の航空写真地図
をはじめ、国内で1点しか残されて
いない資料が20種、文化史上・科学
史上貴重とされる資料が7種見つ
かった。1日に発表された新発見の
「伊能大図」の写し4枚もこの中に
含まれる。

洋々とたどる流れに 大図見ゆ
(福田弘行)



伊能忠敬写真・海上保安庁保管庫

外国の文献のなかの忠敬先生（二）

秋間 実

まえがき

本誌第三五号（一〇〇四年一月）に載せていただいた拙稿「外国の文献のなかの忠敬先生」の「まえがき」のなかで、畏友・津田靖久博士がインターネット上に探し出してくださった忠敬先生関連サイトにブラジル発ポルトガル語のものもあることを、申し述べました。*Mapa do Japão*（「日本の地図」）がそれです。今回は、これを訳出ししてご紹介します。

ただし、その前におことわりしておかなければならぬことがあります。それは、この翻訳が、ポルトガル語の文献の説解にかんしてはまったくのかけだしにすぎないわたしがはじめて手がけた仕事であるために、確信がもてず判断に迷った箇所を二、三残してしまった、ということ（その箇所は、訳文中に（？…）という形で原語とともに示しました）、この不備をどうか大目に見ていただきたい、ということです、——致命的な欠陥ではないはずですので。

訳文

「…」内は、わたしによる補足です。
なお、ご参考までに訳注を付けました。

いちどは覚えてたまち忘れてしまうものですから、くりかえしながらもなん十回も辞書をひきなおし変化表を見なおさなければならぬという、悪戦苦闘の連続でした。が、それでも、実質三ヶ月のかなり集中的な勉強の結果、基礎課程をいちおう修了することができ、あまり複雑でない平明な文章ならば辞書と首引きでなんとか読みこなせるまでになりました（と自分では認定しています）。もちろん、まだよちよち歩きで、危なつかしく頼りなく、もっと勉強・経験を積まなければなりませんが、まずはこの第一作をご覧いただきたい、と思います。

日本の地図

十三世紀の後半、マルコ・ポーロ(Marco Polo)「一二五四一一三一四」が自分の東方旅行について記録を書いたとき、すでにヨーロッパには、世界地図と世界についての幅の広い見かたとがあつた。これによつて、大航海時代に東方の探検を始めるのには東方の諸海域の地図は欠くことができない、と考えられていた。

なにしろ、ポルトガル語というのは、これまでにまったくつきあつたことのないことばとして、まさかこの年齢（七六歳）になつてこれを一から学ぶことにならうなどとは、夢にも思つていませんでした。しかし、忠敬先生の隠居後のいつそう加速された勉学と、その後の測

ポルトガル人たち——たまたま (*...por sua vez*) あの国「日本」に到達した最初の外国人（ヨーロッパ人）となつた⁽¹⁾——が手に入れた最初の日本地図は、行基図（gyoukizuu）と呼ばれるものであった⁽²⁾。これをもとに、ポルトガルで一五九五年に、外国で印刷された最初の日本地図がつくり出された。二つの地図を比較すると、ポルトガル産のほうがすでにもっと仕上げられている。しかし、本州（Honshu）（主な島）がまだ不釣り合いに大きすぎるし、地図には北海道（Hokkaido）という島が欠けている。

（1） ポルトガル人が種子島に漂着したのは、一五四三年のことであった。その後、貿易商人やイエズス会士などが、東南アジア方面から、きわめて困難で危険な船旅にもめげずに、あいついで来日した。たとえば、早くも一五四九年にはイエズス会士フランシスコ・デ・シャヴィエル〔ザヴィエル〕（Francisco de Xavier）〔一五〇六—五一〕が鹿児島にきて、五一一年まで平戸・山口などで伝道している。時は戦国時代であった。医療活動を伴うこともあつたかれらの布教活動がどれほど危険で困難な条件のもとで行なわれたかは、たとえば、東野利夫『南蛮医アルメイダ——戦国日本を生きぬいたポルトガル人——』（柏書房、一九九三年）によつてその一端をうかがうことができる。

（2） 『広辞苑』によると、「行基図」とは、つぎのバラグラフに説明があるように、奈良時代に僧・行基がつくつたと言われる最初の日本地図のことであるが、現物は存在せず、江戸時代初期までの日本地図の総称となつたという。

行基（Bonzo Gyouki）（六六八—七四九）の作品である、と言われる。しかし、これにかんしてはなに一つ具体的に証明されていない。僧・行基は、仏教の高僧で、全国を巡歴して、仏教の教義の普及と東大寺（Templo Toudaiji）の建立⁽³⁾のための資金の取り集めとに献身し、国いろいろな地方に池・用水路・橋・道路を建設して、その合い間に、土地の測量図をつくる能力を養つた。しかし、地図がかれの著作だというのは、どちらかと言えば、民間に広く流布した盲信であるよう見える。どのような形でにせよ、地図は、十一世紀の終わりから中世「の終わり？」までのあいだ利用された。こんにちもまだ存在している行基図は、京都（Quioto）の仁和寺（Templo Ninnaji）に保存されており、一二〇五年という日付「年付？」が入れられている。印刷された作品という様態では、わたしたちは『拾芥抄（Shuugaishou）』⁽⁴⁾がある。これは、十六世紀の終わりと十七世紀全体にわたつて出版された、一種の百科事典である。

（3） 菩薩宗總本山東大寺は、聖武天皇のイニシャティイヴで七四年に創建された。

（4） 『拾芥抄』は、『広辞苑』によると、歳時・文学・風俗・官位・典礼・国郡・神仏・衣食・吉凶など有職故実にかんする事典であるという。編者は洞院公賢で、孫・実熙が増補したとされる。漢文体の三巻本で、鎌倉時代末期にできあがつたとか。

一六〇五年、徳川家康（Ieyasu Tokugawa）〔一五四二—一六一六〕は、国のすべての封土——領地の地図を入念につくりあげていた——をあらまし（*em desenho*）整頓した「させた？」。そして、このよにして、近代（Idade Moderna）は江戸時代（Período Edo）のは

じめに、『慶長日本図 (Mapa do Japão Keichou)』が完成した。一六四四年、幕府 (Governo Feudal) の新しい命令により、おもむね地方地図の再統合が行われた。そこから出発して、「軍学者」北条氏長 (Ujinaga Houjou) 「一六〇九一七〇」が『正保国絵図 (Mapa Shouhou Kuniezu)』を縮尺四三万一〇〇〇分の一で命入りに仕上げた。これは、精密につくられた地図である。しかし、蝦夷 (Ezo) (北海道) を含んでいなかった。

一八〇〇年、北海道近海でのロシアの動きが激しくなつて開国を求める圧力を増大させた年の年に、伊能忠敬 (Tadataka Ino) 「一七四五—一八一八」——暦 [複数] (Calendários) にかんする勉強に並外れた興味をもつてこる、千葉地方 (Província de Chiba) の日本酒醸造業者 (um fabricante de sake) ——が、或く天文学者^(a)と組んで、北海道の土地と全日本のその他の土地との測量を始めた。こうして、一八二一年に『大日本沿海 [輿] 地 [全] 図 (Grande Mapa da Costa Litorânea do Japão)』を完成させた。伊能忠敬は、一八一八年、自分が地図の完成の前に死んだ。「この地図は」、いんにちの諸地図といふべし、緯度一度との相違が一〇〇〇分の一以下という、並外れた正確さをもつた仕事である。現在、縮尺三万六〇〇〇分の一の大図が二四枚ある。[加えて、中国 (同、二一万六〇〇〇分の一) 八枚と小図 (同、四三万一〇〇〇分の一) 三枚とがある。] (e)

(7) 「特別小図」と言われている伊能図の一種。渡邊、前掲書、(b)

(5) 間 重富 (一七五六一八一六) のいか。

(6) 渡邊一郎『伊能測量隊まかり通る』NTT出版 一九九七年、一ページ、二五五ページ、参照。

その地図は、後年の「いねゆゑ」「ハーボルト事件」の原因となつた。

ドイツ人フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト (Philipp Franz von Siebold) 「一七九六一八六六」は、一八一三年に或るオランダ商館の医員として日本へきて、おもに長崎 (Nagasaki) は出島 (Dejima) の地域に五年間滞在して、日本にかんする調査のための材料を集めた。ジーボルトは、江戸で天文学者・高橋景保 (Kageyasu Takahashi) 「一七八五一八一九」から、かれのもつてこる地図 (f) を一枚受け取つた。一八二八年、帰国の旅にさいして、船が長崎湾で浅瀬に乗り上げた。そのとき、船の内部でその地図が発見されたのである。そして、このばあい、諸地図を外国へもちだすことは、明確に禁止されていた。ジーボルトは、一年間、幕府による保護観察 (liberdade vigiada) のもとで滞留し、そのあとで国外追放された。地図を贈つた高橋景保は、捕えられ、獄中で死んだ。しかし、地図は、没収される前に、機先を制して (c-durante a madrugada) 模写され、こういう形でドイツに行き着いた。あとや「一八三二年から五四年にかけて」かれの著書『ニッポン (Nippon)』が現われて (g) constou' m-ロッペに日本の真実の様子を知らせた。[「ハレハレ」] いの地図は、ヨーロッパの人たちがもつていたあの国についての見たを想像上のジパング (Jipang) からほんとうの日本へ変え「るきつかけになつ」たのである。

現在、日本のいわした諸地図を調製する「吟味しながら仕上げ」^(h) とは、公共土木事業省 (Ministério das Obras Públicas) に所属する国土地理研究所 (Instituto do Território Nacional e Geografia)

の任務になつてゐる。

X X X

訳文は、以上です。

申しあげましたが、このテキストでは、「行基団」・「東大寺」・「拾芥抄」・「慶長日本団」・「正保国絵団」・「大日本沿海地団」が、それぞれローマ字表記のあと丸括弧内にこのとおり漢字表記されていて（訳文では配列の順序がこれの逆になっていますが）、ひどく目立ちます。ここに、右の国土地理研究所における日本地団（および日本歴史）研究の成果の一いつの蓄積が反映されている、と見てよいのでしようか。

それとも、これは、このサイトを設けている日伯文化連盟（Aliança Cultural Brasil-Japão）の文化交流の努力の表現でしようか。

いずれにせよ、このテキストは、日本地団の歴史についてまったくなにも承知していないなかたわたしにとっては、それなりに教えられるところの多い興味ぶかいものでした。が、個々の記述がどこまで正確かについては、確かめる必要があるのではないか、確かめたいものだと感じましたし、また、もっとほかにも日本地団はつくられていたのではないか、知りたいものだ、とも思いました。

そして、かんじんの忠敬先生については、かなり見当はずれの記述もあるようだ、残念でした。先生の家業を酒づくりときめているのは正確でしょうか？ なによりも、先生の興味が暦に向かれていたというのだけでは、日本全土の測量・地団づくりに注がれたあの情熱がどこから生まれきていたのか、それがまったく明らかにならないのではないか、と気になりました。みなさんは、どのようにお読みになつたでしょうか？

（あきま みのる・東京都立大学名誉教授）

「充電」 日本経済新聞 5月2日サンデー・ラッケイ・セカンドステージから



若い友との豊かな人脈

南伸坊さんのイラストがいい。編集委員足立則夫氏が伊能ご夫妻に取材している。隠居後に歴史に残る仕事ができたのは、江戸で天文学者、至時の弟子になり、先端の学問である天文曆学や測量技術を学ぶ五年間の充電期間を持ったおかげだ。

江戸に出る前に漢学の素養は近くの久保木清淵から学んだ。感心するには、年下の人からも謙虛に学び、人間関係を大切にする点。そんなところから人脈が育つのだろう。

測量の旅先でも大名や知識人と交流を深め、当時としては非常に広範囲の人脈を築く。偉業を可能にしたのは充電といわれるが、充電前後に築いた豊かな人脈こそ大きな武器になつたようである。

伊能夫妻は言う。「研究会では思わぬ関係者の子孫と出会えて楽しい。これもチユウケイさんのおかげです」。

『旌門金鏡類錄』(四)

小島一仁

不受不施派法難

前回は、忠敬の養子盛右衛門が地頭所に提出した文書から、天明の飢饉に際しての忠敬のはたらきについて記したが、「金鏡類録」第二冊には、その盛右衛門の報告書の下書きについて、寛政四年（一七九二）から六年までのいくつかの事実が記されている。次に、それらの事実を手短かに書きとめておく。

寛政四年二月、伊能三郎右衛門（忠敬）は津田山城守から「多年村方取べり其上勝手用向も骨折り出情候ニ付」ということで三人扶持を与えることになった。永沢治郎右衛門も同様であった。同年十二月、殿様（津田山城守）が百人組頭となつた。

寛政五年二月末、三郎右衛門は「伊勢両官太々神業成就三付」、七左衛門・平右衛門・為右衛門と共に佐原村出立、三月朔日、地頭所に御暇顧に出たところ、殿様より、餞別として道中羽織と目録金二百疋を与えられた。

寛政六年二月、勘定奉行所より、荒地起返見分のため役人下向、同年三月、代官内方鉄五郎役所より「御触」到来、その内容は、御料所村々のうち孝行・奇特の者の報告、上方等より出店で商売をしている

者の報告、溜井・用悪水路渉普請が行届くようにとの申付等である。次に、不受不施派弾圧に関する記述があるが、これは、伊能家史料の中では珍しいものなので、説明と共に、原文もとりあげてみたい。不受不施派とは、江戸時代を通じて、キリスト教と同様に、幕府から弾圧された日蓮宗の一派である。「僧は日蓮宗信者以外の者からは供養を受けず(不受)、信者は、日蓮宗以外の僧には供養を施さない(不施)」という信念を固く守り、たとえ、徳川家の法要に出仕することを命じられても僧はそれを拒否したので、幕府は、この派の考え方を「邪義」として禁止したのである。不受不施派は、度重なる弾圧にも屈せず、地下にもぐって信仰を守りぬき、江戸幕府が倒れて後、明治九年(一八七六)になって、ようやく信仰を公認されたのである。

○解説文　—（—）内に記したのは細字の部分である。

同年秋御小人目付大橋善四郎様荒井源兵衛様、御竈為御用御当地
町人御名前^二而手前宅を御尋御止宿 其節三郎右衛門江重キ御方より
御差図之趣^二而伊能勘解由と申御書御見^セ被下、尚又中川勘三郎殿より
り（其節御目付^二）去二月廿八日浦々御取締為御用御勘定御奉行御郡
代兼久世丹後守様御一同当村御着手前江御止宿、御出立其節青山幡
摩守様より先祖^五被下候御書九通御用人小林盛太夫殿御取次^二而御一
覽有之候、其節は三郎右衛門伊勢參宮^二出立^二而我等度々御目通御咄

之由御内意有之候趣被仰聞候、其後関東御郡代兼中川飛騨守様御事也）家柄
吉様大嶋友三郎様関東御郡代附御代官大貫治右衛門様御手原原善右
衛門殿宮下順藏殿と御一同御越、暫御逗留（而南在々不受不施蜜々ニ
御穿鑿有之、内信心之僧徒住居仕候村々に不意ニ御踏込有之候所此
儀内々洩候逃出候得共、其村役人江嚴重御吟味ニ右僧徒御召捕其
外ニ玉造村与左衛門南中村治兵衛老母御捕被成、御勘定御奉行（御
公事方）曲淵甲斐守様江御差出しニ相成候（南中村治兵衛老母は老
病ニ而不罷出内ニ相果候）

不受不施派の全国で最大の拠点は備前岡山であつて、現在も岡山県御津郡御津町の妙覚寺が總本山となつており、岡山市内にも不受不施派の寺がある。関東では、下總香取郡南部、現在の多古町、栗源町あたりが中心であつて、江戸時代には、幕府の弾圧による「法難」がくりかえされた。寛政六年（一七九四）の末から翌年にかけて「多古法難」と呼ばれる弾圧があり、不受不施派僧俗二一名が投獄され、うち二〇名が拷問死、残り一名が三宅島へ流罪になつたというが、ここに記されているのは、その「多古法難」の開始を示すものと思われる。

忠義問題の歴史

忠敬は、以前、寛政二年（一七九〇）に、地頭所へ隠居願いを出したことがあつたが、これは聞きとどけられなかつた。そこで、念願の伊勢参宮をおえた翌年、寛政六年の一〇月に、また、隠居願いを出した。

文中二人の役人が「町人御名前にて手前宅を尋御止宿」とあるが、おそらく、名前だけではなく服装も町人姿となつて、ひそかにのりこんできたのであろう。それでも、「内信心の僧徒」が住むという村々に踏み込んだ時には、すでに逃げ出したあとであったというのである。玉造村南中村とあるのは、現在、多古町に属する地域である。なお、多古町に島という部落があるが、現在、この部落では全戸が、そこにいる正覚寺（江戸時代は妙光寺）という不受不施派寺院の佃徒となつて

○解説文

乍恐以書付奉願上候

一私儀去ル天明五年より村方後見被仰付、其後御扶持方迄被下置
難有仕合奉存候、併一軀病身^ニ付御掛り様迄隠居願之仕度段相伺
候處殿様御家督御間も不被為在候間今暫相勤村方取締等別而出
情仕候様被仰聞候^ニ付押而当年迄相勤候得共、年増病身罷成候間
改家名致相続為致、私儀は先祖より祖父迄之名^ニ御坐候間隠居名
勘解由と改名仕度奉存願上候、此段可然御執成被下候様奉願上候
以上

寛政六年

寅十月

御知行所

下總国佐原村

伊能三郎右衛門

御地頭所様

御役所

この隠居願を出しても何の沙汰もなかつたので、閏一月下旬になつて、江戸小綱町の出店をまかせていた養子の盛右衛門から追願させた。すると、隠居が許されることが確実であることがわかつてきた。そこで、すでに二八歳になつていた長男の景敬に嫁をむかえて家を持つがせることにした。常陸国音谷村の横須賀勘兵衛の長女が嫁に来る」ときまつた。一二月一日夜婚礼が行われ、親子ともども改名し、三郎右衛門であった忠敬は勘解由となり、直右衛門であった景敬は三郎右衛門となつた。翌一二日「親類、役人、組内重立候百姓、出入由縁之もの」を呼んで振舞つたが、その節、名ひろめをした。このとき

景敬の妻となつた女性は、その後、伊能家史料には二度と姿をあらわすことなく消えてしまった。おそらく、この結婚は失敗で、間もなく不縁となつたのである。景敬は、後に、上総国東土川村（現在東金市）の小川家の娘りてを二度目の妻に迎えたが、その時期がいつのころであったのか、正確にはわからない。しかし、最初の子の三治郎（忠壽）が文化三年（一八〇六）に生まれているので、その前年か前々年、景敬が三八、九歳のころであつたろうと考えられる。

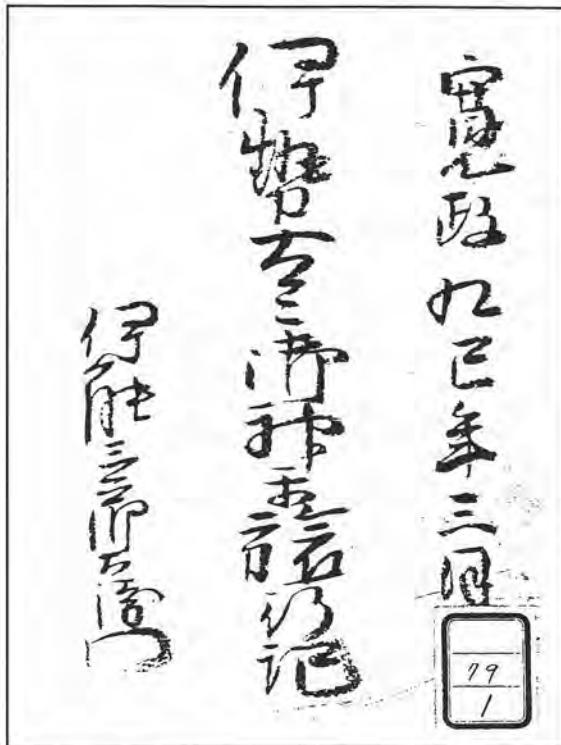
寛政六年一二月、忠敬は、地頭所から隠居を認められ、隠居扶持として一人扶持を給せられ、「苗字^キ道中帶刀は其身一代」用いることを許された。また、景敬も、父の「勤功」によつて、苗字・道中帶刀を許された。

『金鏡類録』第二冊には、その後一〇枚ほどにわたつて、「孝行者」「奇特者」に関する記述が続くが、それらについては、いちいち説明することは省略する。ただ、地頭所から幕府に提出した「上書」に隠居後の忠敬についての記述があり、その中に、忠敬が村政につくした功績を述べた後、「此のもの一軀心掛能、量地町見術曆算術等修行仕候ものに御坐候」とあるのに目をとめておきたい。忠敬が隠居して出府する以前から、すでに測量術を身につけ曆学も学んでいたことは、伊能家の他の史料にも散見するのであるが、このように公式の文書に記されたのは、これがはじめてではないかと思われるのである。

次に、伊能景敬が、「伊勢両宮太々御神樂^{ニ付}」、寛政九年（一七九七）三月十六日に江戸出立、五月十三日に帰府したことが記されている。そのとき、景敬も旅行記を書いた。半紙（B4版）を四つ折にしてとじたようなものであるが、その表紙を見ていただこう。

「寛政九已久年三月 伊勢太々御神樂旅行記 伊能三郎右衛門」と記された文字は、景敬の自筆である。これを前にかかげた『金鏡類録』の文字とくらべてみていただきたい。一見しただけで筆跡がちがうことがわかるであろう。わたしは、本誌第三四号で、『金鏡類録』の編集者は伊能景敬である。だが、その筆跡は景敬のものではなく」と書いたが、それは、このことではつきりしたと思う。

第二冊には、最後に、佐原村本宿組の百姓等が、「伊能三郎右衛門先祖より代々奇特之趣」を評定所に箱訴したことに関して、墨付紙二枚ほどの記述があるが、それについては、次回に譲りたい。



生徒が元気に新校歌披露

柏木隆雄さんが作詞 佐原香取中学

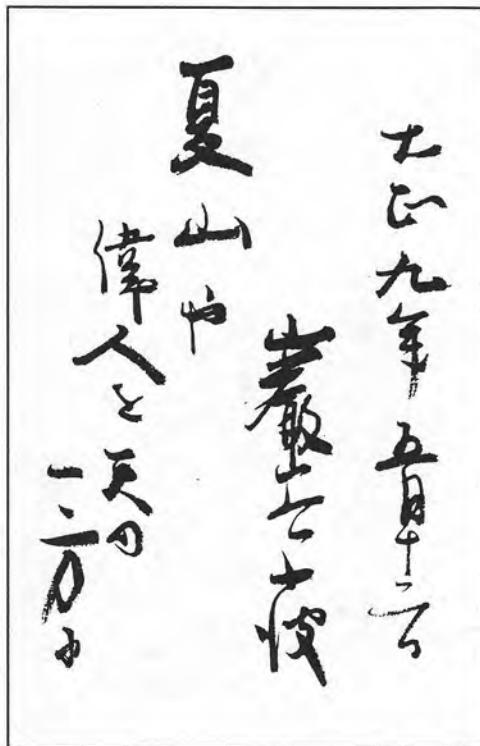
佐原市香取で建設が進んでいた市立香取中学校の新校舎と体育館が完成し、3月24日に竣工式が行われ、新校歌が披露された。同校は市立第二中学と第四中学の統合にともない新設されたもの。同市出身の作詞家、柏木隆雄さんが作詞を担当。柏木さんは多古町の久賀小学校なども作詞している。作曲は東京都の小林秀雄さん。（千葉日報）多方面でご活躍の柏木さんは「東京の夏・音楽祭関連公演」では新作歌曲「霞ヶ浦風の漁」の作詞を担当。今後青少年向けに伊能忠敬テーマの合唱曲づくりをめざしている。

香取中学校校歌

利根流域に 春満ちて
さくらさくらの 大社
生命の芽生え 清らかに
わが学び舎も 花の中

香取の社を 仰ぎ見て
天の光を 胸に受く
期したる希い いつの日か
精励自ら 道拓く

津宮河岸の 波静か
流れ目指すは 太平洋
世界に向けて 開かれる
香取中学校 いまここに



いわや さざなみ（一八七〇—一九三三）
童話作家。名は季雄。巖谷一六の子。東京生まれ。尾崎紅葉・川上眉山らと硯友社を興し、のち童話文学に力を注いだ。著「日本昔漸」「日本お伽漸」「世界お伽漸」など。

（広辞苑）

☆一昨年、広島・呉の入船山記念館を訪れた帰途、念願の尾道に立ち寄った。千光寺山山頂の展望台から、重なり合った家々や瀬戸内の海を眺め「文学のこみち」の文学碑を読み上げながら道を下ると、二五もある碑の中に巖谷小波の句を見つけた。

大屋根は皆寺にして風薰る

芳名録の彼の句を思い出し、なぜか知人に会つたような懐かしさを覚えた。

（伊能陽子）

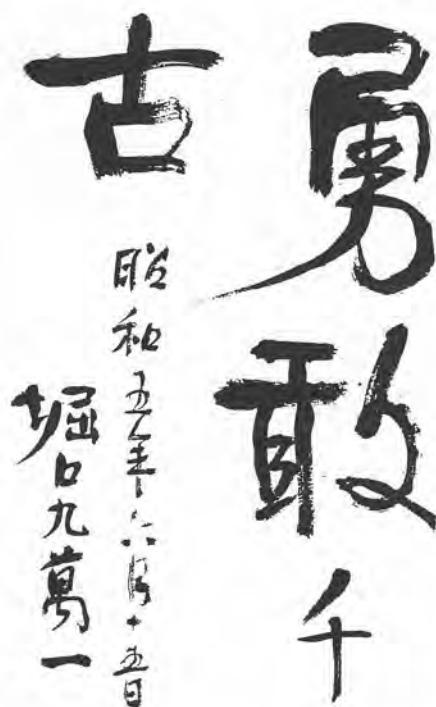
わかつき れいじろう（一八六六—一九四九）
政治家。松江生まれ。東大卒。蔵相・内相を歴
任、一九二六年憲政会総裁となつて組閣、三〇
年ロンドン軍縮会議首席全権。翌年民政党総裁
となり再び首相、満州事件勃発後、辞職。以後、
重臣として活動。

（広辞苑）



ほりぐち くまいち（一八六五—一九四五）
明治・大正期の外交官。新潟県生まれ。朝鮮在
勤中の一八九五年閔妃虐殺事件に連座、帰国を
命ぜらる。のち復職してオランダ・ブラジルな
どに駐在、ブラジル公使、ユーゴ兼ルーマニア
公使をつとめて、退官。文芸通として知られ、
国際文化振興会派遣の文化使節として中近東を
訪問したこともあつた。詩人堀口大学は長男。

（コンサイス人名辞典）



交際範囲が広く人望の厚かつた忠敬

佐久間 達夫

伊能忠敬が、伊能家の十代目当主として家業や村政に励んでいた頃の佐原は、利根川水運の中継地として栄え、当時「小江戸」と呼ばれるほど賑わいを見せていました。

なかでも伊能三郎右衛門忠敬家は、酒造、米穀の売買、金貸し、川船運送などによって財産を蓄積し、佐原では、永沢治郎右衛門家とともに資産家であった。

そこで、伊能家がどのような交際をしていたかを知るために、忠敬が関西方面へ旅行したときに記した「伊勢參宮留守見舞覚帳」、忠敬の長男・景敬と三女琴の「七つ祝祝儀帳」、忠敬の妻・達の「葬式控」と「新盆見舞控帳」の内容について記してみよう。

「伊勢參宮留守見舞覚帳」は、忠敬が四十九才のとき、寛政五年の二月二八日から六月の初旬まで、津宮村の久保木清淵、僕茂八、親族の伊能平右衛門、伊能七左衛門、伊能為右衛門、知人の久保木深四郎、石井市郎右衛門、天満屋兵十、佐兵衛家僕菊右衛門の総勢十人で、伊勢・奈良・吉野などへ旅行した時に、留守見舞をいただいた人の住所、氏名、品物を記述したものである。

○ 見舞者

佐原村の親族伊能茂左衛門、伊能權之丞、関場乙右衛門、永沢治郎右衛門、永沢半右衛門、永沢吉郎兵衛、永沢半十郎、大須賀八郎右衛門、小堤村の神保理左衛門（忠敬の父貞恒の家）、片貝村の布留川弥右

衛門（長女稻の夫の出生家）、南中村の平山藤右衛門（忠敬の義母民の出生家）、飯沼村の信太権右衛門（平山藤右衛門季孝の二男の養子先）、太田村の加瀬佐兵衛（忠敬の二女枝の嫁ぎ先）、栗生村の飯高政四郎（飯高尚寛の娘千枝の夫）、潮来村の窪谷庄兵衛（千枝の夫・政四郎の出生家）を始め、佐原村の商人、百姓、船頭、寺院、それに近隣の村々から百四十八名の見舞者があった。

○ 主な見舞品

松魚（鰹の別名）二六人、鰹十九人、鱈十三人、鮎五人、鰯鰆五人、せいご五人、鰯六人、其の他の魚十二人、赤飯十三人、しんこ二人、野菜四人、お金三人。

一番多い品物は魚類で、鰹が全体の三分の一を占めている。魚以外では、赤飯、しんこが多い。
旅行の土産として忠敬は、奉公人一十三人に、お金を総額で一両三分二匁五分、銭五貫文を与えている。但し、番頭、手代、下男下女など職階によつて金額に差があった。

なお忠敬は、「忠敬先生日記（十三）」の巻末に、

金三歩 津田侯（注、佐原村の領主）より御餞別。

金壱分 東嶋平橋（注、佐賀藩士、伊能測量隊参加希望）御餞別。
金武歩 伊能平右衛門（注、伊能家の親族）御餞別。

金武歩 永沢治郎右衛門（注、伊能家の親族）御餞別。
金壱両 文女に合力。

と、記述している。これは、第五次測量の餞別の内訳であろう。全

国測量のときの餞別の記述は、これが唯一である。「文女」については、

伊能家に「林文より伊能お姉様へ」という書状が所蔵されているが、ここに記述されている「文女」か否かは不明である。

次に忠敬の長男・景敬が七才の時（明和九年）に行なった「帯解祝の祝儀帳」の内容について記してみよう。

長男景敬は、長女稻が出生した翌々年（明和三年）に生まれ、伊能家の嫡男であったので、祝儀持参者も二百三十八人を数え、品物は、衣類、履物、食料品などで、なかには高価な品の名も記述されている。

○ 親族からの祝儀持参者

伊能七左衛門、伊能權之丞、伊能市郎兵衛、伊能茂左衛門、伊能八郎兵衛、伊能八之丞、伊能太郎兵衛、柏木久兵衛、永沢半十郎、永沢半右衛門、永沢忠右衛門、永沢治郎右衛門、金田郷左衛門、円城寺治郎左衛門（以上佐原村親族）。

神保忠藏（小堤村、忠敬の兄）。

石井新右衛門（荒川村、二代柏木乙右衛門の妻出生家）。

猪谷庄兵衛（潮来村、飯高尚寛の娘の夫出生家）。

○ 主な祝儀品

麻	九八人、軽目麻	十人、平麻	六人。	
扇子	箱十八人、扇子	二二一人。		
草履	七人、下駄	四人、雪踏	一人。	
博多帯	三人、丹後帯	一人、郡内縞帯	二人、帯	一人。
青梅縞	一人、桟留縞	一人、中形小袖	二人、絹小袖	一人。
酒三人、鴨	二人、大鯉	二人、鮒	一人、平魚	一人。

才魚（あゆの別名）一人、小鳥（ことり）一人、菓子（くだもの）四人、印籠（いんろう）一人。
お金二人。

荒川村（現佐原市荒川）の石井新右衛門家では、「呴」（かき）を贈つている。「呴」とは、藁で作った穀物入れで、二十年くらい前までは佐原でも農業をしている家では、親の家の母屋の新築や葬儀などには米一駄（四斗入れの米俵二俵）を届けていた。と、江戸時代に佐原村の木戸場であつた藤左衛門の子孫が話してくれた。

なお忠敬の三女琴の「七つ祝」（寛政七年）には、親族の伊能七左衛門、伊能茂左衛門、伊能平右衛門、伊能八之丞、伊能道祐、伊能權之丞、伊能幸左衛門、油屋四郎兵衛、柏木久兵衛、柏木乙右衛門、永沢治郎右衛門、永沢仁兵衛、永沢藤次郎、永沢半右衛門、円城寺治左衛門、布留川弥右衛門、それに久保木太郎右衛門など七十四人から、扇子箱（二七人）、平麻（十九人）、軽目麻（二三人）、帶地（六人）、縮緬（五人）、縮緬帶（一人）、八丈（一人）、折手本（十人）、鴨（一人）、平鮎（三人）、それにお金などが届けられた。

凶事では、忠敬の妻・達の葬列と新盆見舞について記してみたい。

「達」は、宝曆十二年（一七六二）十二月八日に忠敬と再婚し、忠敬との間に三人の子どもをもうけ、天明三年（一七八三）十二月二十九日に四十三才で死去した。「達の葬列」は、次のように記述されている。

○ 伊能達葬式控（伊能淳所蔵、伊能忠敬記念館保管）一部撮影

葬列
日光 横川岸 嘉兵衛
月光 横川岸 吉兵衛

碑心源妙唱日義高師
幕或加

至仍不平一月

諸活

導師

門套

本事屋

未封

毫番

本橋元

柏屋幸右衛門

源助

開封

九兵衛

横川岸

久右衛門

幢幡

橫川岸

藤兵衛

幢幡

橫川岸

長兵衛

幢幡

橫川岸

次助

白高張

新井宿

仁兵衛

白高張

新井宿

平兵衛

燈籠

內

弥助

燈籠

內

儀八

三番

砂水

水戸屋与兵衛

諸僧

導師

四番

明松

木京屋弥右衛門

四華

平山大作

燭台

永沢孫吉

六番

下宿 伊能平右衛門

大香炉

大黒屋卯兵衛

七番

手香炉

砂水

水戸屋与兵衛

幢幡

内

幢幡

内

白高張

内

白高張

内

幢幡

内

幢幡

内

幢幡

内

未封

内

月光

内

日光

内

未封

内

未封

内

未封

内

未封

内

未封

内

手香炉	富右衛門	拾四番	天蓋 杜氏 久兵衛
位牌	鐵之助（付人安兵衛）	拾五番	後興 新地 伊能茂左衛門（付人新藏）
手香炉	加納屋文右衛門	後興	新井宿 仁右衛門
白高張	新井宿 茂八	新地	白高張 新井宿 市郎兵衛
白高張	新井宿 与右衛門		
九番			
本尊	中村 平山藤右衛門		
大乘經	内 忠助		
拾番			
盛物	伊能平三郎		
盛物	柏木倉之助		
拾壹番			
先輿	横川岸 伊能七左衛門		
拾武番			
先輿脇	新町 柏木久兵衛		
先輿脇	松崎理兵衛		
拾六番			
六角仏	曳人 清蔵		
杖	内		
傘	内		
拾七番			
挟			
草履	内		
下駄	内		
拾八番			
荷米			
式拾壹番			
式拾壹番			
太兵衛			
徒や なみ			
盛もの			
盛もの			
本飯			
い弥ね			
後輿脇			
後輿脇 内			
佐五右衛門			
加納専助			
拾三番			

桿 桿	參拾番	蜜柑	梨子	洗米	茶	水	団子	武拾四番	武拾參番	二
生花	生花	式拾九番	式拾八番	式拾七番	式拾六番	式拾五番	團子	武拾四番	武拾參番	二
盛 もの	盛 もの	みかん	りんご	ぬめい	ぢゃ	すい	だんこ	だんこ	だんこ	二
多助	多助	鈴木弥市	いく	いち	とし	徒へ	に弥	連れん	とく	さき
							寺宿	春へ	登美	荒久
							あらく	たか	とみ	さき
							ぜん	まん	さよ	ちよ

*注釈

柏屋幸右衛門（本宿組組頭）

平山大作（南中村、忠敬の姉フサの長男）

伊能平右衛門（佐原村下宿、親族）

平山藤右衛門（忠敬の義母民の出生家）

伊能七左衛門（佐原村横川岸、親族）

柏木久兵衛（佐原村下新町、親族）

伊前芳左衛門（佐原村新助・新旅）

木村幸七（佐原木寺宿
新旅）

い 弘（忠敬の長女） 錦木 弼市（木下村の人）

「お前、この新舎は、天明四年三月二日行なつた、伊豆佐古御門、伊豆守職

「達」の新盆は、天明四年七月に行なわれ、伊能平右衛門、伊能権之丞、伊能八之丞、伊能八郎兵衛、柏木久兵衛、柏木幸七、神保理左衛門、平山藤右衛門、平山大作、布留川弥右衛門、窪谷庄兵衛、鈴木弥市、永沢治郎右衛門、永沢半右衛門、永沢半十郎、永沢藤次郎、永沢吉郎兵衛、久保木太郎右衛門、大川治兵衛など百二十六名から新盆見舞があつた。

品物は素麺三六人、線香十三人、大線香一人、蘭花香七人、大提灯八人、提灯一人、ろうそく五人、うどん五人、干うどん三人、菓子一人、牛房五人、その他仮具や野菜などである。

伊能家の慶弔事の見舞者と品物について記したが、このことから伊能忠敬の交際の範囲の広さと、人望の厚さを窺うことができる。忠敬は、このような交際のなかで、人との接し方や、人の先に立つ者としての器量を身につけていったのではなかろうか。

大川治兵衛宛

文化四年六月十一日付け書簡「X5」つづき

安藤由紀子

一頭下は少間事にぬ病院
坂部より申り候。前角氣及諸事
諸事所當御申候。頭子年
娘の後事主の佑室上り
活し自ら言候。事務多忙
去らる處。才暇とて之候。此處
此處を候。も詫候。時々病氣有
之。年々此か候。少々活い。自分
坂部より申り候。事務多忙
先年之様出精不致候。其上自分より
坂部へ、此上ノ遠国御用ハ相勤り不申候旨

〔原文〕

- 一、頭二郎四国測量之儀、病氣難相勤旨
坂部へ相断り候筋御聞被成、残念ニ
被思候段御尤ニ存候 顕二郎子年
- 浪人以後、学文は出情、余程上り申候
依之自分ニも高慢、未明より朝、又星
七ツ頃より夜分ハ寸暇をラシミ出精候得共、
地図手伝ハ無精ニテ、時々病氣も有之
- 先年之様出精不致候 其上自分より
坂部へ、此上ノ遠国御用ハ相勤り不申候旨

相断り候ニ付、坂部も地図手伝之儀兼々

聞及候程も無之、日々学文嘶か、自分

一刻ノ了簡斗リ申立テ、熟談少候間

入替候方可宜と、浅草高橋へも申談候て

御家人衆と入替候事ニ相成候 右の儀も

何れ我等江内談も可有之候所、自分

一刻了簡ニテ、坂部江直かけ合ニ及候

「口語文」

一、(尾形) 顯二郎が病氣を理由に、四国測量を坂部(貞兵衛)へ断つたことお聞きになり、残念に思われた由御尤もに存じます。顯二郎、子年浪人以来、学問にだけは精を出し、余程上達しました。そのため自分でも高慢になり、未明より朝にかけ、又昼夜七ツ頃から夜にかけ、寸暇を惜しんで勉学にいそしんでおりますが、地図の手伝いは怠けがちで、時々病氣もしますし、先年のように精を出しません。その上自分が直接坂部へ、これ以上遠国の測量は勤められぬと断り出ました。坂部も地図手伝いに付いて、かねがね耳にしたほどでもなく、毎日学問の嘶か、自分だけの考えを押し付け、皆とじっくり話しこむことも少ない様子なので、入れ替えた方が良いと判断し、浅草高橋(景保)殿へもそのように申上げた結果、御家人衆と入れ替えということになりました。四国測量辞退のこと、初めに私に内談あるべき所、自分だけの考へで、坂部へ直に掛け合つたのです。

尾形顯二郎は、香取神宮の神官の次男ということになつてゐるが、

有名な算学家、会田算左衛門の実子で、父に算学を学び、一六歳で忠敬の内弟子になつた。すぐに測量に従つたので、あまり勉強する時間がなかつたにちがいない。

その彼が急に熱心に勉強し始めた。地図の製作にも熱が入らない。第二次から続けて四回測量に従事してきて、特に前回第五次の、ほぼ二年間にわたる中国地方沿岸を廻る難事業にさえ耐えてきたのに、こへきて忠敬に無断で、天文方に次の四国測量を断りたいと申し出た。忠敬は触れていないが、これには何か理由がなければならない。

前回の測量は、初めて天文方下役と忠敬内弟子の混成大部隊で行われ、両者の間はしつくりというわけには行かなかつた。御家人の下役同士もなれない重労働でごたごたしたし、天文方下役筆頭の市野金助は途中で江戸へ帰つてしまつた。測量になれた内弟子たちは、格としては上位の、御家人達の仕事ぶりに不満がつのつていた。後半忠敬が長患いをしたことがきっかけとなつて、内弟子達の無念の暴發が起つた。現地で食事に不満を唱えたり、買い物に値引きを要求したり、等のことがあつたらしい。

帰府直後、この手紙が書かれた前年の文化三年一二月一五日、内弟子だけに偏つた処分が言い渡された。最も有能な内弟子平山郡藏と小坂寛平は、「破門」。尾形顯二郎・伊能秀藏(忠敬の庶子)・門倉隼太は、「謹慎」である。このとき顯二郎も秀藏も、同年の二十一歳であつた。

測量隊の行動は、一々萩の目付けを通じて幕府の目付けへ報告されてゐた。まだ若い高橋景保の後見として、江戸の天文方にいた忠敬の師間重富は、七月中にこの不行跡を知り、まだ鳥取辺りを測量中の平山郡藏に宛てて警告の長い手紙を書いた。土分でないもの同士の、心のこもつた忠告である。

「学問せずとも、体力あり算術達者にて測量術さえ熟練なれば測量は出来ること、一方天文方下役は役人で、算学の能力のみで天文方に引き抜かれ測量推算を始めた者ばかり、身分は高からうとも自分の役だけの勤めしかしないもの故、長年経験豊富なあなた方から見れば、気に入らぬ事も多いでしょう。

去る夏に市野金助は、病氣と申立て帰府し、たちまち全快。伊能子よりも立腹の便りがありました。市野は病氣とのみで一言も話しませんが、役所では皆、内弟子衆と不和の故と推察しました。

役人共は現地で役に立たぬ事があつても、高橋御役所に対して不調法さえなければしくじりにはならず、(長いお付き合いによく知つておられます)門人中特に目立つあなたにご処分が下るかもしれません。

御家人と申すものは、何が起こつても身に疵だけは付けたがらぬもの、心底は「ミズクサキ」人々で、お扶持高だけのご奉公しかせぬもので、私などもこここの所を「勤め」と思い、がまんして無難に付き合つております。私達は、好きでこの仕事をしており、彼らとは大いに違うのです。(間は大坂の豪商で、天文学者であった)

伊能子に万一の事あれば、あなたに任せること、内々話し合つている位ですので、どうかご辛抱なさり、無難にお仕事成就なさるよう祈つております。(抄訳)

重富の恐れていた通り、一行の帰府直後に前述の処分が決まつた。破門された平山郡蔵への申渡書は次のようなものであつた。

左のような行為ありし由

一賄い方料理に不満のある時、かれこれと申立て、長州阿武郡奈古村泊りの節、最初差し出された料理を食せず、又作り直して差し出した料理にも満足せず、外の弟子どもより忠告ありし由

一所々にて買い物せし時、代金は払いしも、下値に買取し事ありし由

一長州萩にて島々渡船のおり、船用意手間取り、間に合わざる事あるを怒り、煙草箱投げ出しし事ありし由

一防州辺にて屏風に貼り付けてありし品を無理に所望し、そのほか書画など所々で懇望せし事ありし由

右などの事伝聞、不埒の至りなり。よつて勘解由方より永のいとま申付ける。

(文化三年一二月一五日 高橋景保申し渡す)

大谷亮吉は、これらの行為は事実無根ではないにしても、この頃幕府小吏の常習ともいうべきことであつたにもかかわらず、内弟子のみ处分が集中したことに、身分間の不和の存在をみていく。

郡蔵と小坂は破門されて忠敬の家を去つた。人手も減つてしまい、二年間の測量結果を地図に起こすことで、処分後六ヶ月目の伊能家の地図御用所は大騒ぎであつたろう。そんな中でこの手紙は書かれた。頸二郎は「謹慎」ですんだので、地図製作の手伝いをしなければならない。しかし学問さえ上達すれば、同心達を見返すことができる。彼は、無念に突き動かされて寝る間も惜しんで勉強したに違いない。

右は西国測量御用のため、昨今二年間にわたり勘解由召連れの所、

伊能勘解由 弟子

平山郡蔵

書簡の続きを見てみよう。

お

(中略)

内弟子ハ内食事九日三日の如
り居候。此中二人、之等若と之等がニ
御仲々内弟子扶助へ一月のマリ候所
下役衆を至ると再び仕事にては

何處沙汰候。此中沙汰二付。

行々之等沙汰沙汰候。

(中略)

【原文】

扱、内弟子御手当之儀、食事共日二、三匁宛

下役衆ハ地図（製作）中、一人へ三人扶持と被仰出候ニ付、
浅草より内弟子扶持共ニ、一日四匁つゝ、下役衆

一ヶ月金壱両宛と再願仕候所、其後

何之御沙汰も無之候、今度ノ蝦夷一件ニテ

猶々延引と被存候、大難儀ニ御座候……(中略)……

(顎二郎等も) 地図仕上げ候て、漸手一杯と存候

夫より、一文なしの学文者ニ相成候事ニ存候

其許ヤ我等が所存トハ、大違ニ御座候

秀藏等も、學問ヲスルホト人ハ悪ク

相成申候、當時同腹ニテ地図ハ附タリニ

學問を出精致候、此短夜も兩人共

いつねルカシラヌ程ニ候間、身ニも中リ

地図等も夫たけ自然と不精ニなり、さつ(雜)ニ

御座候、御察し可被成候

内弟子ハ内食事九日三日の如
り居候。此中二人、之等若と之等がニ
御仲々内弟子扶助へ一月のマリ候所
下役衆を至ると再び仕事にては

【口語文】

さて内弟子のお手当は、食事ともで一日三匁、下役衆は地図製作中、

一人三人扶持との仰せなので、浅草より内弟子に、扶持ともに一日四匁ずつ、下役衆に一ヶ月壱両宛と再願しましたが、その後何の御沙汰もありません。今度の蝦夷一件で、なお延引と思われます。大変難儀なことです。（中略）

（頸二郎も、）（このお手当では）地図仕上げのみで、手一杯と思います。（地図が終わり、次の御用を断るのでは）それ以後は、一文なしの貧乏学者になるだけです。あなたや私の考え方とは大違います。

秀藏も学問をするほど人は悪くなります。現在、（頸二郎と）同じ考

えで、地図は付けたりで学問に精を出しています。
この短夜にも兩人とも、何時寝ているのか分らぬほどで、体にも悪く、地図にもそれだけおのずと実が入らず、仕事も雑になつております。お察し下さい。

地図製作中のお手当では、下役たちが一人に付三人扶持、内弟子たちが、食事ともで日給三匁である。三匁は、地方都市の大工見習の日給と同じくらいであった。木錢・米代・その他の食料や必需品を差し引くと余りが少なく、値上げの要求を出したが返事がないと、忠敬は大いにぼやいている。下男共も「大ドン物」で毎日の料理の指図も彼の肩にかかつていたようだ。

六ヶ月前に同じ「謹慎」処分を受けた伊能秀藏も、謙二郎同様猛勉強中で、地図はおろそかになつていて、前に引用した間重富の書簡に、「秀藏子も短慮の生まれ付きらしく見受けられ」とあるから、彼の豹変ぶりも、悔しさのあまりの猛勉であることは、明らかである。

右の書簡で重富は、「伊能子と申す人は、何事もざつとした気性で上

下四方へ目の行きかねる人です。」と評しているが、学問に対する情熱の底にあつた二人の恨みを察してやれなかつたのは、確かに忠敬の失敗であつた。武士を交えての一隊を率いる事は、初めての経験であつたろうが、重富のような説得をしていれば、二人の気持ちを和ませることも出来ただろうに、一人の学問に対する情熱の底にあるものを、忠敬は気付きさえしていない。「一文なしの貧乏学者」に成るしかないという見方は、あまりにも酷な物言いではなかろうか。

朝日新聞 7月2日 東京最終版

「伊能大図」つながった 最後の4枚発見



渋川家と養子景佑（高橋善助）の家族

伊藤栄子

天文方渋川家十八代、主水は男子が無かつたため、甥に当たる正陽^{モンドウ}を養子に願い出ていた。その後、寛政十一年己未六月十五日、主水の病気が重くなり、同日死去。かねて幕府の許可を得ていた通り、跡は正陽が継ぐことになった。この正陽が景佑の養父である。

このように書けばいとも簡単にみえるが、天文方世襲の手続きは、江戸城で、しかも菊之間において、老中の目の前で申し渡された。

「同年十月四日、養父主水奉願置候通、跡式無相違被下置候旨、於菊之間御老中御列座、松平伊豆守殿被仰渡候」

（十四日、養父の願い出ていた通り、相続については、まちがい無く許可され、城中菊之間で御老中御列席の上、松平伊豆守殿から御達しがあった。）

「同日、天文方被仰付候旨、於御右筆部屋縁類、御老中列座、御同人被渡候」

（同日、天文方として励むよう、御右筆部屋の縁側で、御老中御列座の前で本人に仰せ渡された。）

縁がわで、これを伺つたというと、粗末に聞こえるが、一万石位の大名でも、何々之間には入ることはできず、縁類（縁がわ）で控えることは珍しくはなかつた時代である。

渋川家は、春海以来、代々の天文方であつたから、正陽が養子にな

ると同時に天文方をも繼承した。渋川家十九代正陽は、御徒川口善右衛門春芳の次男であつた。寛政十一年（一七九九）十月四日、養父の跡を受けて、天文方を仰せ付けられている。幼名勝次郎、のち改め渋川富五郎正陽といつた。私が調べた「天文方代々記」では、この正陽で十九代と書かれていたが、他の本では十二代とあり、ここでは代々記に従つて記した。その後景佑が養子に決まり、隠居したのが文化六年七月、（一八〇九）正陽が天文方に在職したのは、わずかに十一年である。妻は以前に亡くなつていた。

正陽總領	早世	渋川安太郎
同 次男	同	同 孫次郎
同 三男	同	同 富三郎
同 四男	同	同 信四郎
同 女	同	
同 女	同	
同 女	同	

（男子は早世にても名を記すべし、とあり女子の名は記入されてない）

渋川正陽家では、七人の子供が一人も育たなかつた。江戸時代は、乳幼児の死亡率が非常に高かつたという、その例をここに見る思いがする。当時家族の中に、たとえば肺結核患者がいれば、助かる手段はなかつたであろう。また、流行病（はしか、庖瘡、コレラ）等もあり、子供の育つ環境は、結構厳しかつたことがわかる。妻と子供らを、全部失つてしまつた正陽は薄幸の人であつた。
景佑が渋川家の後継者と決まり、間もなく正陽は隠居願いを出した。「文化六年己巳七月二十二日、願いの通り隠居を仰せ付けられた」

「同八年辛未正月廿一日、願いの通り剃髪し、一哉と改名を許された」
正陽が出家した理由は不明であるが、家族の菩提を弔つたのである
うか。文政四年辛巳六月十四日病死、享年四十七。品川の東海寺塔頭
(たつちゆう) 玄性(照)院で葬られた。

二十代目 高二百五拾儀

渋川富五郎養子

生国撰津

天文方高橋作左衛門至時次男 初名善助

渋川助左衛門景佑 天明七年十月十五日生れ

妻は朝比奈藤八郎良寛女

景佑は文化三年十二月頃に結婚したよう、伊能忠敬が江戸日記に
書いている。この年、景佑は數えで二十才であった。忠敬自身、伊能
家へ入夫の年が十七才であったから、この場合は特別早婚という訳で
もないらしい。景佑は忠敬らと第五次測量に参加していたが、文化三
年十一月十五日に測量隊は江戸に戻った。このことから、景佑は帰着
した翌月、養子に入る以前に、結婚していたことがわかる。

文化三年十一月十八日(他の文言略)

高橋善助来る。金式両式分、婚礼祝儀を相渡す、と記されている。

忠敬さんは、式両式分がお好きなようで、何度も目にしたことがある。
手切れ金、婚礼祝儀、となると、いつも目出度い数字とは限らない。

「文化五戌辰年八月朔日、願之通り渋川富五郎養子、被仰付候旨、

植村駿河守殿御書付を以て被仰渡候 同六己巳年七月二十二日、
養父富五郎家督無相違被下置候 同日天文方被仰付候」

*古文書では、しばしば主語が抜ける。高橋善助の名が見えない。

(文化五年八月一日、願い出ていた通り、渋川富五郎養子を仰せ付け
られ、植村駿河守からお許しの御書き付けを頂いた。同六年七月二十
二日家督相続の許しも相違なく下され、同日天文方に任せられた。)

助左衛門という名は、渋川氏に代々受継がれてきた名であった。伊
能家でも、世子の幼名を三次郎、成長して三郎右衛門といつていったよ
うに、渋川家の世子の幼名は、六藏、元服して助左衛門、諱(いみな)
は図書である。

渋川家の祖先、春海は改暦の功により幕方から天文方になった。以
後代々天文方を世襲してきた家柄である。その外に天文方を勤めてき
た家に、猪飼、西川、山路、吉田、奥村の諸家がある。この六家の他、
高橋、足立の二家はその後になつて天文方に任せられた。

寛政七年(一七九五)公儀で改暦が決定しても、当時の天文方には、
その人物が得られなかつた。そこで幕府は麻田剛立の高弟である左の
二人に白羽の矢を立て、江戸へ呼び寄せることになつた。

高橋至時、間重富の二人は剛立に入門してから、「暦象考成」の「前
編」の研究に専念していた。寛政の初め頃、重富が手を廻して「後編」
を入手してから、剛立と三人での研究に没頭し、やがてこの本をよ
く解明し、今までの暦説に大改革をもたらすことになつた。

至時は同年江戸へ出向き、観測を行つた。いっぽうの間重富は、天文
方同格として、天文方奥村邦俊と共に浅草の暦局で観測を続け、寛政
丁巳暦の施行に尽くした。

高橋家は江戸に出てから、暦局の側の天文御屋敷に住居していら
しく、景佑もここで父の薰陶をうけ、重富等からも影響をうけていた

のではないだろうか。

天文方渋川家は、春海以後昔の面影はなく、やつと家名を維持するに過ぎなかつた。しかし高橋至時の次男景佑が、文化五年八月、渋川家を嗣ぎ、同六年に天文方になつてからは、全く面目を一新した。兄景保と「ラランデ天文書」の取り調べに当つた。兄弟ともオランダ語に通じ、景保がシーボルト事件で獄死したあとは、足立信頭と共に、「新巧曆書」四十冊を完成させた。また父至時の「新修五星法」を他の天文方と協力して、改訂し「寛政曆五星法統録」十冊と共に、幕府に献上している。

江戸時代には、貞享（じょうきょう）宝曆（ほうれき又は、ほうりやく）寛政、天保と四回の改曆が行われた。初めの貞享曆は渋川春海の努力により、失敗に屈することなく、日夜観測を続け、ついに元の都と、京都の里数差を加えて、日本の国土に合う新曆「大和曆」を創案した。春海の後も、代々の天文方は一応、土御門家の門人になつていて、ことに宝曆の改曆で作曆権が土御門家に移つてから、天文方は全く実力もないまま、たて前は土御門家の門人として服従してきた。その上天文学の研究も大してせず、長いこと地位に甘んじていた土御門家が曆注をつけ、格式だけで高い収入を得ていたわけで、それを見てきた渋川景佑は土御門家の門人にはならなかつた。

宝曆の改曆後、わずかに四十年で曆の上の誤差が生じ、幕府は次の改曆を進めることになつた。高橋至時、間重富らの協力により、「寛政曆」は清の「時憲曆」に里差を加え、さらに麻田剛立の考えた歳差消長法を取り入れたものであつた。しかし改曆後四十年たつて、また天行との間に誤差ができる。天保十三年（一八四二）渋川景佑、山路階孝らが「新巧曆書」九巻を作り、これを土御門家から朝廷にさし上げ、「天保曆」と名づけられた。これは幕府最後の曆法で、きわめて精緻

なものであつたという。明治六年まで使用され、以後は欧米と同じ太陽曆へと改められた。

ここで再び忠敬の江戸日記を見てみよう。一日から年始廻りをする。

正月朔日 晴天 風 八幡参詣（富岡八幡へ初詣）

同二日 曇天 五ツ半後（朝の九時）より年礼に出る。斎藤助之丞

へ行き、夫より根来喜内殿、夫より山路才助、吉田勇太郎（両名とも天文方）夫より下役、中嶋長三郎

柴山伝左衛門、坂部貞兵衛、夫より高橋氏へ参札、間氏も同じ、夫より浜町秋山松之丞へ寄りて帰宿、八ツ少し前（八ツは午後二時）文助、庄作（供か）

忠敬は実に健脚で、少々せつかちだから、こまめに動く。乗り物の発達した今でも、この時間内に、これ程の軒数は廻れないであろう。しかも礼を失わない。

同三日 略

同四日 曇天 五ツ半頃、築地渋川主水、夫より赤羽根森下町、小沢権右衛門へ年札、八ツ少し前に帰宅

この月忠敬は、第六次測量（四国、大和路測量）の旅が二十五日の出立と決まつていて。正月の年始廻りのあと、間もなく旅立ちの挨拶をし、その準備もあり用事は山積している。

同二四日 晴天 朝、築地渋川善助へ行く、夫より曆局高橋へ行き、吉田、山路へ立寄り、御証文之れを請取り、先触れとして帰宅（御証文、先触れは測量の旅に不可欠）

今月四日に忠敬は、築地の渋川家へ年始にいつた。その時は渋川主

水と挨拶を交わしている。日記なので言葉は省略されていて、大まかに会話も書かれていらない。しかし、二十四日には渋川善助へ行くと記され、明らかに善助が渋川家に入っていると受取れる。さらに渋川善助といつては、善助の養子の許しは、前出の通り八月に幕府から出るのであって、表向きはまだ通らない筈であった。それなのに忠敬の心の中では、すでに渋川善助である。忠敬は文化四丁卯年正月にも渋川主水へ挨拶に行つていたし、時々足を運んでいた。

私の推測では、どうやらこの善助養子の件は、忠敬の世話で進められたのではないか、と思うようになった。しかも、測量の旅に先立つて急に善助が渋川家に入居している。もつとも、忠敬が今回の測量の旅に出れば、およそ一年は帰つて来られない。ここで人柄の分つている善助が渋川の家に入つていれば、忠敬にとつても安心して出立できる。また、孤独な渋川正陽にとつても、善助はすでに天文暦学の素养もあり、天文方の後継者として、頼つてもない人だつたに違いない。

常日頃忠敬は、高橋兄弟の相談相手だったといわれる。父の亡い二人にとつては、何かと頼れる恰好の年輩者であつたであろう。また、忠敬は曆局へ出入りしていて、交友も広く曆局の内情にも通じていた。忠敬としては、兄弟の亡父、高橋至時を師として格別尊敬していたから、遺児への思い入れもあつたのではないか。

これは、あくまでも私見であるが、あの当時善助の世話を、親身になつてできる人が、忠敬の外に居たのであろうか。江戸日記を見ても、高橋兄弟が忠敬宅を、絶えず訪問している様子がよく分る。

景佑の性質は非常に几帳面で、細かな旧記でも收拾整理し、自分の

調査研究は雑録聞見録として残した。暦学に関する著書も多くある。

安政三年（一八五六）丙辰六月二十日卒、没年七十才

渋川景佑の戒名 「大機院仁翁滄洲居士」

養父と同じく、品川の東海寺に葬られた。



文政十三庚寅年九月二十三日、二十一才にて初めて御目見となる。天保二辛卯年六月二日、天文方見習仰せ付けられる。七人扶持を支給される。天保改暦で父を助け、「新修五星法」「新巧暦書」「新法暦書」の撰述、編纂に携つた。才氣衆を越え、時の老中水野忠邦に抜擢され御書物奉行に任せられた。弘化元年十二月、オランダ国王の書翰を翻訳し、金二枚の賞を受けられるが、翌二年、書翰の秘密を漏らしたといふかどで、臼杵侯稻葉氏に預けられ、幽閉されたまま没した。閑老水野の寵を得た為め、衆人の妬みを受けたといわれる。この地で病死した六藏敬直の墓は、大分県臼杵市二王座の多福寺にある。

嘉永四年（一八五二）辛亥七月二十五日卒 行年三十七才

戒名 「靈照院月峰宗圓居士」

洪川膳司佑賢（景佑次男）

長男が右によつて御預けとなつたので、弘化二年乙巳十二月十三日総領となる。同三年丙午九月二十五日、十九才で御目見、天文方見習となる。安政四年丁巳三月二十九日、父助左衛門の家督を繼ぐことを許された。また同日天文方をも勤めるよう、御扶持方五人を給わつた。兄の科は、父の景佑にまでは及ばなかつた。そのため景佑は直ちに、次男を総領とする手続きをとつたのである。しかし、この膳司も天文方になつて間もなく他界してしまう。

渋川孫太郎敬典（六藏の總領で景佑の嫡孫）

己八才

「弘化二乙巳年（一八四五）十月十五日、実子總領渋川六藏儀、稲葉富太郎へ御預け仰せ付けられ候に付き、改易仰せ付けらる。尤も十五

才に相成るまで、景佑へ御預け仰せ付けらる」

（実子で跡とりの六藏が、九州の稻葉家へ御預けが決まり、家は改易となつた。ただし子供は幼いので、十五才になる迄、祖父が預かるよう、仰せ付けられた。他に孫娘一人も景佑が預かつた。）

安政五年（一八五八）戊午三月四日、養父助左衛門の跡式を繼ぐことを許され、同日天文方を仰せ付けられた。細かい記録は無いが、弘化二年に八才であつた孫太郎敬典は、安政五年には二十一才である。途中赦免により、父の罪を許されたものであろう。明治三十七年に六十七才であつたという。

東海寺



和尚、国学者の賀茂真淵、
渋川春海らの墓があり、
品川区教育委員会の指定
史跡となつてゐる。

附記

大日本数学史の中に、天文方関係資料の記録があつた。それによると、旧渋川家蔵書は内閣文庫に伝えられたものが、後、宮内庁書陵部に移管された。当時の目録には、天文曆学書と和算書を合わせて、二千二百三十五冊、二百三卷、百九帖、十七枚、八幅という厖大なものであつたと記されている。

参考文献

*天文方代々記

大崎正次編

国立国会図書館蔵

*大日本人名辞書

講談社

*新潮日本人名辞典

新潮社

*歴史読本73-1-12

こよみ人物史

渡辺敏夫

下巻

大阪府立図書館蔵

*改易（江戸時代の刑の一つ、身分を奪い家禄、屋敷を没収する。）

カイエキ

*江戸時代、将軍の代替りの時などに、赦免が行われた史実がある。

最後の江戸居間屋

寺井美奈子著

筑摩書房

伊能忠敬研究会との出会い 思い出あれこれ

大沼 晃

小生は「人生設計」セミナーの講師を務めている。人生設計の内容はキャリア設計と家庭経済、心身の健康づくり、生きがいづくりの四本柱から成り立っている。「生きがい」のなみは、自己実現が五〇六割占めており、その他に「出会い」や「生きる価値」「愛」「遊び」「仕事」「在る事」などが含まれると医学博士小林司氏が著書で述べている。(NHKブック「生きがい」とは何か)

小生が独立開業をした年の一九九五年一一月七日付け日経新聞文化欄に掲載された伊能日本図探求会代表渡辺一郎氏の記事に出会い、それまでこころの奥底に眠っていた自己の生きがいを発見するきっかけになつた。元来、地理や歴史に興味・関心が高く、あらゆるジャンルの本をこれまで乱読してきたが、伊能忠敬に関しては小・中学校の歴史の中で学んだ時以来、すっかりと忘れ去つていた。研究会に入会後、例会で諸先生方の新説発表や逸話などを傾聴し、九十九里バス旅行や深川八幡周辺の探訪等々のイベントに参加しながら伊能ご夫妻や佐久間達夫氏など諸先輩方と交流をさせていただき至福の時を過ごし今日に至つてはいる。みなさんは人徳豊かで知識豊富、いつも分け隔てなく接していたとき感謝感激である。研究会を通しての人や地図・歴史書、事跡などの出会いを楽しみながら伊能忠敬にあやかり、我が人生後半を面白おかしく過ごすのが夢のまた夢である。

その夢は、利根川河口から江戸川と交わる千葉県北端の関宿町まで利根川沿いに遡上し、そこより江戸川を東京湾まで南下しながらありし日の水運の姿を偲びたいと考えている。佐久間氏よりご紹介を受けた「利根川高瀬舟」渡辺寅二著を読み進める中、明治中期のころまで船宿の二階の窓から顔を出すと、目の前を数多くの白帆が行き交う風景が壮観であったと、土地の古老たちの懐かしむ話が出てくる。のんびりと水辺の道を独歩するのもよいが、研究会のみなさんと川の道を遊覧船で房総のヴェニスと言われる水郷に立ち寄りながらの船旅もよいのではなかろうか。文人墨客ばかりでなく江戸庶民も遊覧船で利根川を下り香取、鹿島、息栖の三神社と流域詣でを楽しんだそうだ。是非、次回研究会のイベントとして取り上げ企画推進していただきたい。

現在の佐原は、当時の面影が無いが江戸の人口を支えた日本有数の物資の集積地として大変栄えた川の港(河岸)であり、また、米の作柄を中心とした情報が諸国からの集つてきた情報基地でもあつたようだ。調べれば調べるほど、何故、伊能忠敬が隠居時に多額の資産を残せたのか、記録魔であったのか、佐原は何故急速に榮え、ある時点で衰えて行つたのか等々好奇心を搔き立てる興味が尽きない。その好奇心を満たすためには小生の専門領域である経済・金融分野を江戸時代まで遡らなくてはいけなくなりそうだ。手始めに東京江戸博物館で江戸時代の物流ルートを、関宿城博物館で利根川で活躍した「高瀬舟」を見聞しながら時代背景を詳しく調べてみたい。

最後に、海上ルートの開拓に貢献した「河村瑞賢」のお墓と顕彰碑が鎌倉の建長寺境内にあることを先日偶然に知つた。

(おおぬま
あきら・ライフデザイントリニティ工房主宰)

伊能忠敬記念館だより 伊能 横雄

今後の展示予定は、次のとおりです。

・第三六回収蔵品展（七月二五日まで）

佐原の六月は、あやめ祭りで賑いました。国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている街並の一画に位置する当記念館も、一年で一番お客様の訪れてくる時期でもあります。

伊能忠敬記念館の近況などお伝えします。

伊能淳氏 紺綬褒章を授賞

本年四月二八日付けで、伊能忠敬から八代目のご当主である伊能淳氏に紺綬褒章が授与され、六月二十日に岩瀬良三・佐原市長から伝達いたしました。

重要文化財に指定されていた伊能忠敬に関する資料は、昭和三六年四月に伊能家から佐原市に寄贈されました。今回の授章は、それ以外に伊能家伝えられていた「伊能図下書寄図」「測量範囲図」、佐原村関係文書等の資料を、昨年四月に新たに寄贈していただいたこと（「伊能忠敬研究」二〇〇三年第三四号に掲載）に対するものです。

当時は、淳氏ご夫妻とお嬢様に、お住いの埼玉県朝霞市から遠路お出でいただき、当記念館において佐原市長からお手渡しました。そのあと、ご家族を囲んで暫し懇談し、淳氏の穏かな人柄にふれながら和やかな一刻を過しました。

あらためて、今回のご寄贈に心から感謝申しあげたいと思います。

特別展示等

当記念館では、資料保護のため、重要文化財等は、二ヶ月ごとに展示替えをしています。

当記念館が所蔵する東日本地域の大図六九枚のうち、岩手県（釜石市）から青森県（青森市）までの七枚を展示

・第三七回収蔵品展（七月二七日から十月三日まで）

同じく、白川（出羽）、江戸（奥州）の一部の大図七枚を展示

・特別展「伊能忠敬と北陸測量」（十月五日から十一月二八日まで）

第四次測量の意義と概要を、北陸方面を中心紹介する。

展示内容としては、糸魚川事件、佐渡測量、北陸の測量家（石黒信由、小原一白）、能登名跡図などを計画中です。

記念館長が交代

このたび、当記念館館長が交代しました。平成十年の新忠敬記念館オープン以来六年間に亘り館長として勤められた西野元氏が三月末日をもって退職し、五月一日付で私が就任いたしました。

渡辺一郎代表理事をはじめ伊能忠敬研究会の皆様には当記念館に對しまして、これまで同様のご指導とご支援をお願いいたします。

私事に亘りますが、私の前身は役人であります。このたびの館長就任の話は全く突然のことでの迷いもしたのですが、これもご縁かと思うところもあり、この任に就かせていただいた次第です。

私の家は、忠敬の六代前に三郎右衛門家から分れ、七郎衛門と称しており、その四代目が伊能豊秋になります。



紺綬褒章を授章 伊能淳一夫妻と息女千絵ちゃん・前列
後列は左より秋山教育長、岩瀬市長、伊能新館長

伊能豊秋日記 宝暦十三年正月二十一日には、「三郎右衛門方より養子の儀につき上総□参り見届け呉れ候様頼みに御座候。」

又、正月二十四日には、「三郎右衛門養子の儀につき中村（現・多古町）へ罷り越し、右養子相談、藤右衛門方へ申し談じ候所、上総辺に宣敷き仁これ有る由申すに付き、右相談仕利度き儀相頼みに……」

そして、十一月二十九日に、「三郎右衛門養子相極り、此方へ引取り日限相談仕り候。養子なかうど三郎右衛門にて下拙と申し候え共、延引仕り平右衛門に仕り候。」

十二月八日に、「三郎右衛門方婚礼。……養子の儀は坂田郷の内小堤村と申す所神保氏、中村藤右衛門方養子の積もりにて三郎右衛門方へ遣わされ申し候。……此方三郎右衛門親族共罷り出て婚礼首尾よく相調い申し候。」

以上、これもご縁とする一端です。

おわりに、本年二月に佐原の祭りが、国の重要無形民俗文化財に指定されました。この祭りは、忠敬の時代にも「天王様祭礼」、「諏訪神社祭礼」としてとり行われていたもので、現在は、それぞれ七月と十月に行われていますが、今年はこの度の指定を記念して十一月にも特別に山車の引廻しが予定されています。

この時期の佐原は、なお一層、昔日を彷彿とさせてくれると思います。ご来訪をお待ちしています。

(なお、文中、伊能豊秋日記の記述は、香取五郎氏解説文を引用させていた
だきました。)

(伊能忠敬記念館新館長・いのうたてお)

品川より六郷川手前迄の図

伊能忠敬隊の測量図を模写

植田 浩一

文学、天文観測技術の学習に精進し、五年後の寛政十二年（一八〇〇）から実際の測量を始め、文政元年（一八一八）に七十三歳で没するまで全国を測量し（北海道北岸は間宮林蔵が測量）、その測量データに基づく地図をつくった。これは初めての科学的な実測日本地図であった。その測量・地図づくりの方法は、伊能忠敬記念館に掲示されている説明文によると、次のようなものであった。

一、伊能忠敬記念館で見た図面

佐原の伊能忠敬記念館を見学した時、気になる絵地図が展示されてあつた。大森・羽田・六郷の実測図らしい地図であつた。さきごろ、思い出して佐原を再訪してみた。気になつていた図面は「品川より六郷川手前迄の図」と題されている地図で、半紙大の和紙に品川の南端を起点に大森から羽田道に入り、羽田弁天、六郷の渡しまで測量線がのび、海岸（川岸）線が描かれ、山・田・塁・海川が四色に色分けされているものである（図名は現管理者が展示用に書いたものと思われる）。

この図面を手に羽田道を歩いてみたいと思ったが、展示品類は撮影禁止と掲示がある。そこで手持ちの紙に写し始めたが、展示ケースのガラス越しなので測量線の小さい曲折に手古摺る。随分こまかく測量したものよと感じ入りながら二時間ぐらいで作業を終わる。写し終えたものを原図と見比べると、不満足なしきものであるが、その日は一たん終わりとし、他日再挑戦することにする。

帰宅後、写し終えたものを現在の地図と対照したり、図中の地名、伊能忠敬の地図づくりの方法などについて調べる。

二、伊能忠敬の測量方法

伊能忠敬は五十歳の時に年來の素志を実行し江戸に出て、数学、天

伊能忠敬の測量のしかた

(一) はかるうとする二点間の方位を磁石ではかり、また一定の長さの繩（間繩）を実際に土地に当てたり歩測で距離をていねいに測定した。（導線法）

(二) 諸町村から見える目立つた山や島の方位を精密に測定し、これらの方位線が一点に合うように町村の位置を修正した。（交会法）

(三) 宿泊するとき、象限儀を使っていくつかの恒星の高度をはかり、その土地の緯度を算定し地図作成の場合の資料とした。

四 これらの数字はすべて野帳に記入しておき、それをもとにして地図は室内で書いた。

(一) の導線法とは、ある地点に立ち（これを初めの測点、測始点といふ）、前方の目標の方位をはかり、その数値を野帳に記入しておく。次にその目標までの距離をはかり、その距離を野帳に記録する。一番目の目標が二番目の測点となり、これを次々とくり返して測線を前進させて行き、最後の目標がその日の測終点となる。

百科事典によると、忠敬測量隊の測量してあるいた距離は四万三千

*（地球の赤道一周は約四万キロ）、方位測定回数は十五万回だという。単純に割り算すると、二八六回ごとに方位を測定し距離をはかり、その數値を野帳に記録することを十五万回くり返し地球を一周した以上の距離を歩いたことになる。見通しのよい直線的な長汀なら一キロでも二キロでも測定区間を設定できようが、曲浦や突き出た岬などは測定距離をこまかく刻まないと、曲がり具合や突出状を描くことはできなかつただろう。この距離をはかるのに忠敬は歩測によるものもあつたらしい。忠敬の一歩は二尺三寸（70センチ）だったという。

忠敬が測量に用いた方位盤は杖の先に磁石をのせた三六〇度目盛りのもので、さらにこまかい目盛り、一度の六分の一、すなわち一〇分単位まで読みとれる半円方位盤が忠敬記念館に展示されている。

方位をはかつて地図にする場合、偏差という問題がある。磁石の北が地球の北極より少し西の方へ偏ったところを指すというのが西偏角で、現在、日本ではこの西偏角は六度から七度といわれている。西偏角は地域によつても違うので国土地理院の五万分の一や一萬五千分の一の地形図にはその図面の西偏角が「磁針方位は西偏⁶、20（昭和57年）」というふうに表示されている。ここに（昭和57年）と断つているように、西偏角は時代によつても違う。磁石のさす北、磁北は歴史的にもゆれていけるのだそうである（磁北に対して地球の北極は真北という）。忠敬の測量して歩いた時代の一八〇〇年代初頭のころは、この西偏角は関東地方ではちょうどゼロの時代だったそうである。だから磁石の北をそのまま図面の北として作図できたことになる。

伊能忠敬記念館に、忠敬作製の地図と現代とを重ね合わせた比較図が掲出されている。それを見ると、関東、中部、近畿、中国、四国は

現代の地図とほとんど重なるが、仙台以北、北海道、九州南半分について、伊能図は現代の地図より東の方にズれている。これはこの地方では磁石に偏差があつたからではないのだろうか。

忠敬は西洋書のいう西偏角についても承知していたが、それは磁石が悪いからであり、自分が作った磁石は精巧であつて正しく南北を指すと信じて疑わなかつたのだという。それには何度も実験をくり返して偏差のないことを確認していたのだそうだが、実験したのが関東地方においてだつたら、当時は偏差がなかつたんだだから当然の結論である。偏差は地域によつて、また時代によつても違うことに気がついていたんだろうか。忠敬記念館の説明では、現代の地図とズれるのは、経度のズレによるもので、それは日出や日没の各地同時観測の誤差が原因だという。

□の交会法というのは、伊能図を一覽になつた方はご承知だろうが、富士山目がけて各地から朱線が数多く引かれている。あの朱線が交会法の方位線である。すでに位置の確定したA、B、C、Dの各地から富士山の方位をはかり方位線をひくと、四つの方位線が一点に集中する筈である。それが富士山。一点に集中しないときは、例えばA、B、Cからの方位線は一点に集中するが、Dからの方位線だけがはずれるような場合には、Dからの方位線は誤差としてA、B、Cからの方位線の交点と一致するようDの位置を修正するということである。

交会法は現在、山歩きで利用されている。山行中、自分が地図上のどこにいるか分からなくなつた場合、周辺の自分が見知つてゐる山を二つひろい出し、磁石でその方位をはかる。次に地形図上のその二つの山から方位線を引くと、その交点が現在、自分が地図上のどこにいるのかを示している。これが出来るのは、現代では精密な地形図があ

るからである。

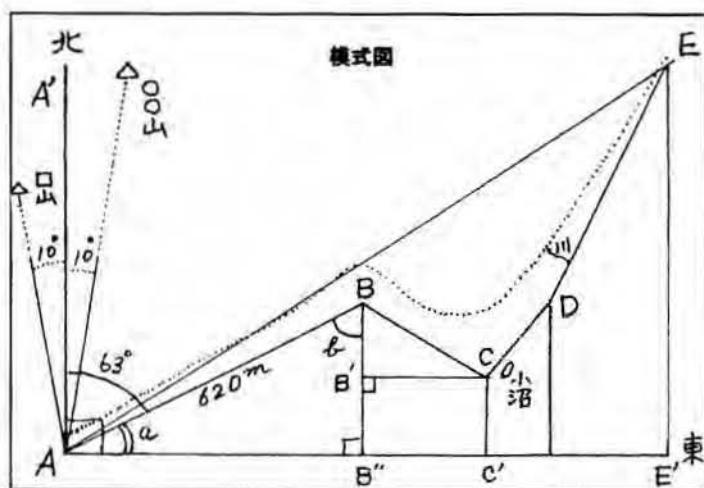
(3)の天文観測については、忠敬記念館に四分の一円の象限儀が展示されている。また、天文観測などに使われたのだろう「対数表」も展示されている。この対数表には「忠敬手写」と注がついていて、ついでに筆写されている数字の羅列は、忠敬の実直な人柄をしのばせるものである。

伊能図には、筆者の見た限りでは山の高さは書き込まれていないが、研究者によると、忠敬は富士山の高さをはかつていて、それによると、享和三年（一八〇三）に富士山の高さは三九二七・七尺と計測しているという。いま、富士山の標高は三七七六尺ということになつていて、

四の室内で作製された伊能図は大図が一里を三寸六分（三万六〇〇〇分の一）、中図が一里を六分（二一万六〇〇〇分の一）、小図が一里を三分（四三万二〇〇〇分の一）とする縮尺だった。これは一つの元絵図から異なった縮尺の地図づくりが行われたわけである。大図は二四枚、中図は八枚、小図は三枚で日本全国をカバーした。

三、伊能忠敬の地図作製方法

忠敬の地図作製の具体的な方法は、彼の弟子だった人が忠敬の没後に書きまとめた『量地伝習録』が残されていて、『伊能忠敬の科学的業績』（保柳睦美編著・古今書院発行）に全文が掲載されている。その具体的な方法は数学の分野で、数に疎い文系人間にとっては少し手に余るのだが、次節の図面を読むためにも必要なので、筆者の理解した限りに基づき、簡単な模式図を使って話を進める。



① A	測始点	○○山へ 10 度	□山へ 350 度			
② A	から B へ					
③ B	から C へ					
④ C	から D へ					
⑤ D	から E へ					
⑥ E	測終点					
海	26 度	40 度	120 度	63 度	620 m	海へ 30 m
へ	500 m	180 m	260 m		海へ 70 m	
20	m	m	m		20 m	右に小沼
					海へ 60 m	
					50 m	で小川
測始点						

測始点Aを通る南北（A'A）東西（A-E'）の十字を引く。AからBを望む方位角度は63度だからAから63度の方位線を引き、その線上の620mのところがB。BからA-E'に垂直をおろすと、ABの長さとa角とb角の角度が分かつて、同じようにしてCC'、B'C'の長さも計算できる。これで順次に計算して行くと、E-E'、A-E'の長さが分

かるからEの座標がきまる。この計算は実際には速算器具があつて目盛りを読みとれば計算できたようである。

これらの計算は三角函数の知識によつて可能となる（忠敬時代には三角函数表は割円八線表と呼ばれていたのだそうで、現在、記念館にその手拓本があるという）。このようにして測始点から測終点が見えなくとも、その方位角、直線距離、基準線からの距離を算定した。これらのデータと測線は地図の骨格で、これに野帳に記載された「海へ〇ヶ」などの書き込みを加味して海岸線を描くと点線のようになる。出来上がった地図には骨格の測線は表れないことが多い。

四、測量・作図の苦心を物語る下図

再度、佐原の伊能忠敬記念館に伊能測量図の模写に出かけた。前回の失敗に懲りて、こんどは、方眼紙、曲尺（かねじやく）、分度器、色鉛筆を持参しての挑戦である。次の見開き左頁にあるのがその出来上がり。展示ケースの上からのぞき込みしながら写し取つたものなので不完全な点があることはご容赦ください。見開き右頁は明治十四年図。対照できるように紙面上部を南にしてある。

五、図面の解説

測線の曲がり角に「」のように横に短くとげのように出ているのは梵天（測量ボール）を立てて方位と距離を測定した印であろう。

「巳廿二分半 直六寸七分」などの原図の寸法はすべて指定通りに作図したが、本誌一頁におさまるように縮小コピーしてあるので、図上の長さは原図通りではない。

原図は凡例で四色が色指定されているが、その他に黄色も使われている。東西・南北の基準線と方位線は朱線、単色印刷だと、これらの

線と海岸（川岸）線が交錯してしまつて分かりにくいので、海岸（川岸）線は少し太い線にした。

「品川村初」から「大モリハシ」の次の測点までは東海道で、この区間は右の明治十四年図と見比べると分かるが、測線は道なりに曲線で表されている。忠敬の測量は三角法を利用しているので、測線は直線であるべきなのに、曲線であることはおかしいが、本来、この区間も測量は直線で行われたのだと思われる。東海道は幅五間と広いので、測定区間を間違にとつてもある程度の曲がりは直線でカバーできたろう。道なりに曲線にしたのは、この街道を熟知の人が多いからではないか。この図の主眼はあくまで、より海に近い羽田道と羽田から六郷の渡しまでの川岸線の測量だったと思われる。

品川村田屋：『品川町史上巻』の「品川宿並図」（江戸末期）を見るところ、村田屋を名乗るのは北品川宿三町目と南品川宿三軒家町と二軒ある。立会川を渡る濱川橋がすぐ近くなことと現地を調べて道の曲がり具合から南品川宿の村田屋と見当をつけた。千体荒神の海雲寺の前である。図面に「品川村初」とあるのは「品川村田屋測り初め」の意だろうと思う。「八子田弁天」とを結ぶ方位線が「虫クイ」とある所でとまつていて「品川村初」に届いていないのは解せない。次の行の「巳廿二分半 直六寸七分」などの寸法は「品川村初」と「八子田弁天」を方位線で結んだ上の数値である。

羽田弁天（八子田弁天）：空港に入る弁天橋を渡つた多摩川べりに玉川弁天社があつた。現在は弁天橋の西の袂から一〇〇㍍ぐらい西の所に移され祀られている。

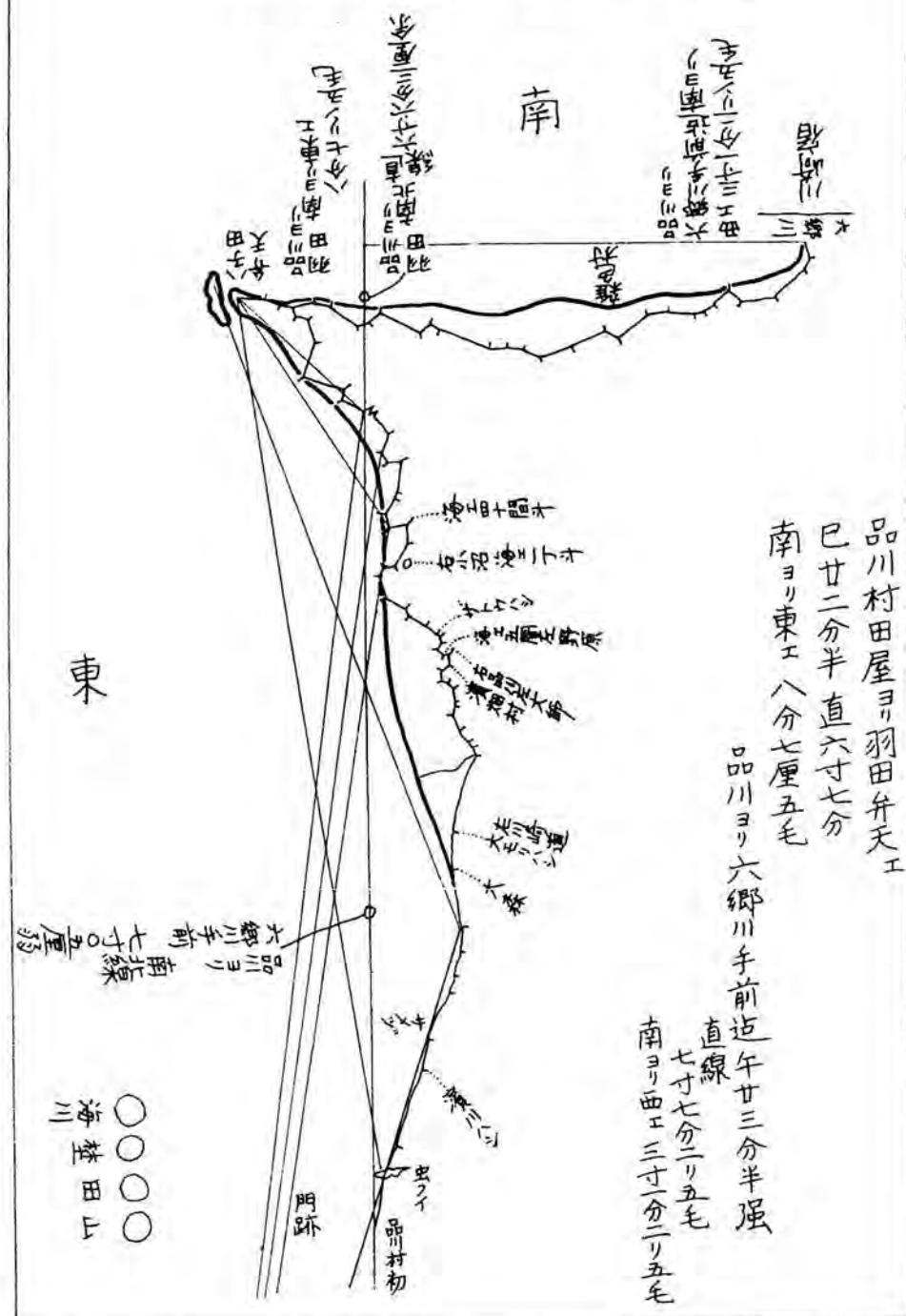
巳廿二分半 直六寸七分：村田屋から羽田弁天を望む方位角とその距離が図上では六寸七分になるということ。巳は一五〇度、それに廿



明治十四年図

左ページと対照しやすい
ように南を上にしてある。

品川より六郷川手前迄の図



二分（度）半を足すと一七二度三〇分の方位角になる。六十七分は三節の図でAEに当たるので、測量データから算定できる。

この六寸七分から、この図面が何分の一の縮尺で描かれているかを計算してみる。現在の地図（区役所発行『大田区地図』）で、海雲寺の前の村田屋があつたと思われる所から空港敷地内の羽田弁天があつたと思われる所までの距離を測ると、七〇一三〔尺〕になる。この数字を尺貫法の分に換算すると（一尺=〇・三〇三〇〔尺〕）、一三一四二九二一分になる。この距離が図上では六寸七分であらわされているのだから、二三一四二九二を六七で割ると、三四五四一となつた。この数字には、旧位置の見込みや計測の誤差が介在するとみると、二節で述べた伊能大図の縮尺、三万六〇〇〇分の一と同じ縮尺だろうと考えてよさそうである。つまり、この図面は伊能大図用の下絵図と見られる。

南ヨリ東エ 八分七厘五毛：羽田弁天は村田屋を通る南北の基準線より八分七厘五毛東ということ。三節の図でいうとEEに当たる。これまでの三行は測始点の品川村田屋についてのものである。

六郷川手前込：測終点の六郷の渡しのこと。以下の三行は測終点についての寸法である。

午廿三分半強 直線七寸七分二リ五毛：午は一八〇度、それに廿三分（度）半強を加えると、二〇三度三〇分強、これが村田屋から見た六郷の渡しの方位である。村田屋から六郷の渡しは見える筈はないので、これは測量データから算定した数字。直線七寸七分二厘五毛は三節の図のAEに当たる。

南ヨリ西エ 三寸一分二リ五毛：六郷の渡しは村田屋を通る南北の基準線より三寸一分二厘五毛西の方へでているということ。三節の図でEEに当たる。

品川ヨリ六郷川手前 南北線七寸〇五厘弱：村田屋から南北の基準線で七寸五厘弱のところが、六郷の渡しを通る東西の基準線との交点になつてある。三節の図でAEに当たる。

門跡：方位線の片方の点が図幅外になるので、後日のため図外の目標を注記したものらしい。門跡とは門跡寺院のこと、當時、浅草の東本願寺を東門跡、築地の西本願寺を西門跡といつていたようだ。測量隊が羽田から見て方位を測る目標にした「門跡」とは、築地の西本願寺の大屋根だったと思われる。

大モリハシ：この指示は、もう一つ南の測点（仮にA点とする）に付けるべきなのを付け間違えたのだと思われる。というのは、A点の川の流れは内川に違いないし、A点からの測線は道の曲がり具合から羽田道を示しているからである。A点はいま内川橋である。

浜畠村：旧字名の浜端のこと。現大森東中学の海がわ、貴船神社のあたり。

ザトウハシ：『新編武藏風土記稿』に「座頭橋古川に架す長さ間隔四尺」とある。現在、旧呑川（のみがわ）筋は埋立緑地となつていて、それを渡る陸橋となつてしまつた呑川橋がこれに当たる。

この図面を検討すると、作図にも測量時に劣らぬ苦心があつたことが窺えるし、きれいに仕上がつた伊能図は膨大な計算の集積だったことが分かる。これを全国の地図に亘つてくり返したことと思うと、改めて伊能忠敬の実証科学への情熱とその業績に脱帽する。

六、伊能忠敬測量日記

前掲の図面の測量がいつ行われたものかと『伊能忠敬測量日記』（千

葉県史料近世篇)で調べた。その享和元年(一八〇一)の項に次の記述があつた。

四月二日 朝曇天、五ツ時後平山郡藏・同宗平・伊能秀藏・慶助・嘉助を供し、八幡宮を参詣し直ニ出立、送別人ハ伊能三郎右衛門・同七左衛門・大川治兵衛・伊勢屋平八・大野弥三郎・綿屋富右衛門、領主渡邊清蔵殿品川迄御送別被仰付候、村田と云料理茶屋ニ而送別人と酒宴并ニ中飯、此日昼前小雨八ツ時後次第二降出し暮中雨、七ツ時前川崎ニ着、郡藏・秀藏・慶助ハ大森より羽田へ手分測量、暮ニ川崎ニ着、松平阿波侯當所止宿ニ付泊宿塞り、渡し際新田や平三郎と茶屋を御用宿とす

同三日 朝雨天四ツ頃ニ至ル、仍而逗留「阿波侯出立ニ付」止宿鶴屋十右衛門ニ代ル、郡藏画図ニ初ル、此日六郷渡し場間数を斗ル

同四日 朝五ツ頃川崎宿出立、郡藏・宗平・秀藏三人を川崎より大師河原へ手分測量、我等慶助を連川崎神奈川 保土ヶ谷本道を測ル(以下略)

忠敬のこの測量行は、前年(寛政十二年)の蝦夷地(北海道)につづく第二回の測量旅行で、本州東海岸を測るものであった。この時の測量隊は忠敬を含めて六人で出発する。

日記の中の八幡宮は忠敬の江戸住所の深川黒江町に近い富岡八幡「領主渡邊清蔵」とは、当時、佐原は旗本津田氏(西丸小姓番頭)の知行地で、渡邊清蔵はその江戸地頭所の役人。送別人と壮行会兼昼食を「村田と云料理茶屋」でとっている。これが四節の図面の「品川村田屋」であろう。また「郡藏・秀藏・慶助ハ大森より羽田へ手分測量」とある。忠敬ら本隊は大森から六郷へ東海道を直行するが、郡藏

ら三人は本隊と別れ内川橋から羽田道を「手分測量」している。その翌日の三日は朝から雨で、四ツ(午前十時)に川崎宿に逗留と決定する。この雨で逗留中の宿屋で、「郡藏画図ニ初ル」。郡藏は前日に測量し野帳に記録したデータを「図面に仕立始める」の意であろう。これらの記述から、四節の図面は享和元年(一八〇一)四月二日に郡藏ら三人が測量し、翌日に郡藏が作図したものと思われる。郡藏は忠敬が伊能家に賛入りしたときの仮親、平山藤右衛門の孫、秀藏は忠敬の次男、慶助は忠敬の弟子で、三節に書名をあげた『量地伝習録』を後に残した人である。

〔参考文献〕文中に書名をあげた他、次の二著。

小島 一仁 『伊能忠敬』
(三省堂選書)

川村 博忠 『近世絵図と測量術』
(古今書院)
(うえだ こういち・朝日新聞OB)

編集部注 植田さんからのメッセージです。

本稿「伊能下図の模写」は一昔前の記録で、数理に暗い文系人間、生半可な知識での解説で、間違いがあるうと思うと恥ずかしく感じております。今回編集部の要請で思い切ったわけです。この記事を書くに当つて数回佐原を訪れました。周辺取材で、淨国寺に小島一仁氏を訪ねたり(不在で会えなかつた)、イブ・ペイレ氏を迎えて講演会を開きに行き、その場で研究会に入会したことなど思い出しております。

伊能忠敬記念館とは、土蔵を改装したような旧記念館のことです。三年くらい前に見学した現記念館には、この下図は展示されておりませんでした。できれば、記念館に所蔵されている原図(半紙をヨコ長に使用していた)をもとに測量専門家に解説をお願いしたいものです。

伊能忠誨日記（六）

佐久間達夫

文政五年午年（一八二二）伊能忠誨一七才

八月大

- 二日 箱田泊まる。桑原隆朝入来。今夜四ツ時過重太郎入来、泊まる。
- 三日 予出勤。帰り馬場悔み云置き帰る。今夜、重太郎同道にていく。
- 桑原隆朝入来。
- 四日 今夜五時頃、足立重太郎入来。泊まる。紙屋美次郎、今日より來たる。
- 五日 予出勤。重太郎、予同道行く。今夜、紙屋内義、新五郎來たる。
- 六日 今夜、重太郎、八木泊まる。
- 七日 予出勤。重太郎、予同道行く。桑原隆朝入来。
- 九日 予出勤。今夜、足立重太郎入來たる。泊まる。紙屋内義來たる。
- 一〇日 今朝重太郎帰る。早朝桑原隆朝入來。山本來たる。青地林宗來たる。先生入來あるべき所、先、林宗を以て様子を見にこす。
- 紙屋新兵衛來たる。下河辺來たる。先生の御便り、長萬のツボを致し候様申しこす。又、佐原加納屋治兵衛を呼び候様と被仰故、明朝出立の人に書状を頼む。但し親類へも病氣云遣わす。此後、毎日桑原来たる。
- 一一日 昨夜、保木、長萬へ行き候故、長萬來たる。予御役所出勤。先生云う、今度は大病故（伯母妙薰）引き看病いたせと。予、直ちに帰る。
- 一二日 今夕、紙屋内義來たる。今夜、内義妹來たる。四時頃帰り、又、紙屋内義來たり夜伽。今夕、重太郎來たる。佐原おソノ看病に
- 一三四日 今朝桑原入來。足立へ人を遣わす。直ちに重太郎入來たる。八時過帰る。又、今夜桑原入來。重太郎も入來たる。青地林宗來たる。但し重太郎、内合を以て林宗を迎えて遣わす。紙屋新兵衛、内義、庄蔵等帰る。
- 一四日 今朝、重太郎、林宗帰る。五半時、伯母（注1）死去。上野の

来る様云遣わす。

朝、予源空寺へ行き、帰り御役所により、一両日の暇願い帰る。

上野上総屋の後家來たり泊まる。紙屋内義妹來たる。

今夜重太郎入來、泊まる。

一五日 今夜重太郎帰る。養純來たる。足立長萬來たる。ようよう断りて一服のつもりになる。此迄、長萬のはもらうばかりにて飲まず。此の一服も飲ます。

一六日 紙屋新兵衛來たる。弥三郎來たる。重太郎入來。養純來たる。

上野町の後家來たる。泊り看病。紙屋内義來たる。

一七日 上野町の後家帰る。紙屋庄蔵妻來たる。今夜、紙屋内義來たり夜伽。桑原隆朝來たる。

一八日 今夜紙屋内義帰る。山本來たる。永沢慶吉來たる。明日帰國の由。今夜、久兵衛、ルミ、ソノ來たる。大川は十七日出立の由。一九日 夜、紙屋内義來たる。大野弥三郎來たる。垂搖磨く。今夜、足立重太郎入來。内田弥次馬來たる。

二〇日 大野弥三郎來たる。両国本屋の隣の地面百二十歩ある由。又藏を見に遣わす。又、又藏と紙屋新兵衛地面を見に行く。十七日、吉川御暇の由。下さり金二十五両、今年中の御切米の金の様に三三両也。又、今迄の通り出勤御手当被下。持田、柳屋來たる。大川治兵衛來たる。

二一日 今夜、紙屋新兵衛、又、内義來たる。予出勤。餅菓子御役所に上る。今朝、久兵衛帰國。

二二日 今朝桑原入來。足立へ人を遣わす。直ちに重太郎入來たる。八時過帰る。又、今夜桑原入來。重太郎も入來たる。青地林宗來たる。但し重太郎、内合を以て林宗を迎えて遣わす。紙屋新兵衛、内義、庄蔵等帰る。

後家帰る。所々へ知らせの書状を保木書き出す。桑原養純來たる。り帰り、又來たり終日居る。持田勝三郎來たる。坂部おナミ來たる。尾張町のカネ來たる。伊八來たる。大工東次郎來たる。佐原へ飛脚を二人出す。但し一人は五時頃出す。大病の状。又、一人は四時頃死去の状。おエン來たる。紙屋内義來たる。紙屋より云遣し十五日の御暇にて來たる。今夜、内田弥次馬來たる。三宅勘藏來たる。大坂町の女房來たる。伊八弟來たる。疊屋金左衛門來たる。今夜、予、セオ通夜。紙屋内義も居る。寝る。大野弥三郎來たる。泊まる。東次郎泊まる。湯かんす。

内田弥次馬來たる。桑原養純來たる。紙屋新兵衛、同内義、新五郎、甚七來たる。今八半時過、病氣の積もりにて駕籠にて、予、袴羽織にて、雪駄、其外貨の羽織にて、保木は、袴羽織にて離れて行く。御二階一統、先へ法乗院へ行き待つ。御經始まる時に重太郎、坂部岩五郎來たる。御膳すみ、御二階、足立、坂部帰る。砂村へは半兵衛、保木、忠吉、伊八、東次郎。但し右は明朝予行き一緒に帰る。天満屋八右衛門、弥三郎、其夜帰る。半次は明朝帰る。紙屋新兵衛も行く。これはカケアイ等の用事有り。惣て御寺の御膳四十五、六人前の由。新兵衛、五ツ時頃帰る。六半時頃に、予、加納屋、紙屋甚七、善兵衛等帰る。内田弥次馬、桑原養純留守居して居り帰る。紙屋内義來たり居る。四時前帰る。今夜箱田左太夫來たる。久敷く足痛にて不出。駕籠にて來たる。少し居りて帰る。

六時、予、セオ、リキ、ソノ、紙屋内義、又藏、砂村へ行く。四ツ時過帰る。桑原養純來たる。予入湯。今夜、庄藏女房來たる。

二七日 紙屋新兵衛來たる。リキ、紙屋へ行く。今夜、庇津（柩）にて骨を在所に持參の事定めて、並み法事而已。在所より七左衛門、平右衛門、万兵衛、佐右衛門、長兵衛、八ツ時頃來たる。地主

後家帰る。所々へ知らせの書状を保木書き出す。桑原養純來たる。佐原へ飛脚を二人出す。但し一人は五時頃出す。大病の状。又、一人は四時頃死去の状。おエン來たる。紙屋内義來たる。紙屋より云遣し十五日の御暇にて來たる。今夜、内田弥次馬來たる。三宅勘藏來たる。大坂町の女房來たる。伊八弟來たる。疊屋金左衛門來たる。今夜、予、セオ通夜。紙屋内義も居る。寝る。大野弥三郎來たる。泊まる。東次郎泊まる。湯かんす。

内田弥次馬來たる。桑原養純來たる。紙屋新兵衛、同内義、新五郎、甚七來たる。今八半時過、病氣の積もりにて駕籠にて、予、袴羽織にて、雪駄、其外貨の羽織にて、保木は、袴羽織にて離れて行く。御二階一統、先へ法乗院へ行き待つ。御經始まる時に重太郎、坂部岩五郎來たる。御膳すみ、御二階、足立、坂部帰る。砂村へは半兵衛、保木、忠吉、伊八、東次郎。但し右は明朝予行き一緒に帰る。天満屋八右衛門、弥三郎、其夜帰る。半次は明朝帰る。紙屋新兵衛も行く。これはカケアイ等の用事有り。惣て御寺の御膳四十五、六人前の由。新兵衛、五ツ時頃帰る。六半時頃に、予、加納屋、紙屋甚七、善兵衛等帰る。内田弥次馬、桑原養純留守居して居り帰る。紙屋内義來たり居る。四時前帰る。今夜箱田左太夫來たる。久敷く足痛にて不出。駕籠にて來たる。少し居りて帰る。

六時、予、セオ、リキ、ソノ、紙屋内義、又藏、砂村へ行く。四ツ時過帰る。桑原養純來たる。予入湯。今夜、庄藏女房來たる。

二九日 朔日 三〇日

九月 大

今朝六半時頃亀嶋出立。予、帶刀、平右衛門、万兵衛、忠吉、佐右衛門、治兵衛、リキ、ソノ等、川岸より乗船。扇橋より天満屋長兵衛乗船。此所へ船を付け、上戸は酒を飲み、下戸は餅を買う。八時前行徳へ着。船を上がる時二様に分る。一は、忠吉、長兵衛、ソノ、リキ。一は、予、帶刀、治兵衛、平右衛門、佐右衛門、万兵衛也。此へ予は先触致し、女は連れにリキ故、女連れは丸屋にて馬二疋頼み、ソノ馬に乗る。男連れは大坂屋にて馬二疋頼み、平右衛門乗せ之。落馬致し候。後、皆歩行にて八幡富田屋へ着。女連れは先に着して釜ヶ谷へ行く。男連れは皆歩行にて昼頃釜ヶ谷へ着。二様一緒に泊まる。

松田セオ、祖母泊まり合わせる。右は我等下りに付、セオ一人残り候故、登り吳候様、セオ申し遣わし候故登り候也。故に琴女、佐原へ此度の法事には参り兼候由。

二日 今朝六時頃釜ヶ谷出立。五ツ時過に白井へ着。四時過大森へ着。

九時頃木風門屋へ着。惣て男連れは歩行也。ソノ、リキ女は
変わり変わり馬に乗る。問屋にて中食。平右衛門、万兵衛、我

等は河内屋にて酒を飲む。八時前乗船二隻。下總佐原屋にて酒、
及び夜食。夜四時過本家（佐原）へ着。

永沢半右衛門母、惣兵衛來たる。柏木音右衛門來たる。泊ま
り居る。七左衛門來たる。帶刀、万兵衛帰る。長嶋嘉兵衛（注
3）來たる。泊まり居る。

三日 橋本町内の者來たる。予入湯。半十郎、半右衛門母、仁兵衛、

油屋四郎兵衛（注4）等來たる。加納屋おチセ、新地幸左衛門
後家、新宿イシ等來たる。橋替ババ（注5）來たり泊まり居る。

永沢万兵衛、伊能七左衛門來たる。今夜泊まる。右は加納屋治
兵衛、おチセ、津ノ宮へ帰る故、龍ヶ崎の使い來たる。其外悔
やみに來たる。延寿寺來駕。暮六ツ時過、骨を観福寺へ持參。

予、熨斗目上下にて行く。永沢仁兵衛、半十郎、半藏、太兵衛
の六男吉郎兵衛（注6）田宿の安太郎等、寺迄行く。御經しば
らくあり。葬る。皆々帰宅。

四日 組頭等來たる。油屋四郎兵衛、長嶋嘉兵衛同幕。重ノ助、元喜

等來たる。昼時御トギをあげるため、皆々を呼ぶ。永沢仁兵衛
而已來たる。延寿寺等來たり酒飯を出す。田宿、橋本働き人に
酒飯を出す。五時前（注7）歸る。七左衛門、今夜泊まる。加納屋
おチセ來たり泊まる。今夜、前原逸八來たる。万兵衛來たる。
八ツ時過、予、熨斗目上下にて、順藏サムライ、万兵衛、七左
衛門、茂兵衛、伝四郎、丹平、久兵衛、おチセ、リキ、ソノ仏
參す。其節、飛天、飛天、飛天來たる。予、観福寺參り、院台
に逢い昨日の礼を云う。

五日 油屋四郎兵衛來たり、七左衛門団碁。金田平左衛門（注8）、近

江屋長四郎（注9）等來たる。其外悔やみに來たる。万兵衛、
七左衛門泊まる。

六日 加納屋治兵衛泊り来る。おチセ津ノ宮へ帰る。石屋三郎兵衛

（注5）、奈良屋治右衛門（注6）、鉄之助乳母來たる。牧野の隠
居院台來来。淨國寺尚人來来。今暮六時頃、光明真言あり。來
たる人五十人ばかり。四時前帰る。二七日の退夜故、四十九日
御取越し餅をつく。万兵衛、七左衛門泊まる。

七日 駕籠人足を頼み、観福寺を迎えて遣わす。観福寺、及び延寿寺、

持宝院等來来。御經あり。茶会を出す。又、平膳を出す。予、
万兵衛、七左衛門、平右衛門相伴す。今夜、金田、近江屋、清
見屋、越屋等來たり、青山の役人追々御下り故、証文を返上し、
米を請取候べき相談に來たる。先、願いを見、向こうの云出の
員数に依り、又相談すべき決まる。

八日 油屋四郎兵衛來たる。近江屋長四郎、広屋等來たる。今夕、茂
兵衛内へ行く。七左衛門、万兵衛來たる。今朝帶刀、鎧木へ行
く、泊まる。

九日 飯高惣兵衛、息政四郎來たる。仏參し八時過板湖（潮來）へ出
船す。長嶋嘉兵衛子息を連れ來たる。右子息を此方へよこし度
由。七時頃帰る。平右衛門、相撲見物に行く。加納屋チセ來た
る。泊まる。八時頃先触を出す。但し、成田泊まりにて江戸登
り。（先触は会報前号・第36号に掲載）

一〇日 今朝、元喜來たる。油屋四郎兵衛來たる。七左衛門來たる。昼
後、万兵衛來たる。風邪の由。予、髪月代仏參。神保忠右衛門
來たる。所々より進物あり。但し、関場茂兵衛等の類。今夜、
出立支度す。今夜万兵衛妻、平右衛門妻子、半右衛門母、同孫
娘等暇乞いに來たる。右娘は、内々予に見せるつもり。帶刀來

たり居る。

一一日 五半時頃佐原本家出立。馬二疋成田迄通し。予、七左衛門、佐右衛門、市兵衛、順藏等也。イヅクリ迄は、加納屋治兵衛、平右衛門、万兵衛、忠吉、茂兵衛等、其外略レ之。見送りにて万兵衛は成田迄行くはずの所風邪故イヅクリ迄。

一丁田、又兵衛方にて茶を飲む。元、此の又兵衛は、本家に久しく居候由。此所にて予、佐右衛門馬に乗る。文藏、此所迄送り来たりて帰る。滑川根古屋にて中食。雨降り間もなく止む。

此所にて神事あり。赤飯、にごり酒等を出す。当村名主五右衛門の息・土佐次來たり挨拶す。本通りは道あしく、橋等無レ之由故、助崎通りにして行く。右通り案内は、此所にて馬を頼み、順藏^{いんざく}之に乗り、予、七左衛門も馬に乗る。暮頃成田に至る。先、予、七左衛門参詣し、海老屋に泊まる。

一二日 六半時頃成田海老屋出立。柏木音右衛門此所迄送り帰る。順藏は馬に乗る。成田、酒々井の間なる茶屋にて休む。間もなく馬來たる。予馬に乗る。順藏おり、七左衛門に乗る。酒々井に至る。問屋下役てい者、向かいに出る。中屋にて休む。皆歩行にて佐倉のはずれにて休む。それから白井へ至る。太田屋にて中食。予、七左衛門馬に乗り大和田に至る。同道にて休み、予、佐右衛門馬に乗り船橋に至る。問屋にて宿をさせ今津屋に泊まる。

一三日 五時過船橋出立。予、七左衛門馬に乗る。行徳に至る。信楽屋にて早中食。大坂屋へ荷おろし、間もなく船に乗る。雨止む。七時頃江戸亀嶋着船。橋侯、足立、津田御屋敷、渡辺、中安へ饅頭一おり持參。桑原、

一五日

佐藤、足立、紙屋へ行く。松田セオ、紙屋内義、同妹來たる。予出勤。高橋侯御病氣にて御目通りせず。セオ、祖母、紙屋内義來たる。今夕、田口惣右衛門入來。酒飯を出す。今夜リキ着船す。

一六日

今朝永井へ人を遣わし候所、余程先生御大病故、予、進物台を持ちハツ時頃高橋侯へ見舞し帰る。今夜セオ、祖母を連れ泊り居る。七左衛門用事に上がりて今夜不<レ>帰。府中屋娘來たる。七左衛門留守故帰る。今昼頃、保木来る。

一七日

今朝七左衛門帰る。栗強飯出来る。今昼は皆様へ強飯、及び平皿付ける。此は去年の当候故。今夜伊能平右衛門、永沢万兵衛着。酒飯を出す。予出勤。昼後足立頼まれ同人宅にて校合。

一八日

今朝平右衛門、万兵衛、七左衛門、神田御屋敷へ行き、直ちに鳥越御祭礼見物出る。今夜浅草より吉川御呼出しの書状來たる。

一九日

今朝早々、吉川、予に頼み引く。吉川、御書物同心被<レ>仰付<レ>候。予出勤。松田エン、同人祖母、小網町土浦屋へ引っ越す。今夜、大川治兵衛到着。養純來たる。

二〇日

予、神田屋敷渡辺宅へ行く。今朝七左衛門、万兵衛、結城屋へ行き、皆同じ道渡辺宅へ行く。御悔み申し上げ、田安へ行き申しあげる。今夜養純來たる。

二一 日

予出勤。今日太陽、水星凌犯、望遠鏡を仕掛け見る。不<レ>見。

渡辺にて測量あり、黒子の大なると云う。平右衛門、万兵衛、結城屋へ行き泊まり居る。津ノ宮先生、金江津。

二二日

予出勤。今夜七左衛門、桔梗屋へ行き泊まる。養純來たる。大川治兵衛、佐右衛門、心願を下河辺へ談す。

予、早朝に神田御屋敷へ行く。間もなく出棺。御見送り申して御寺に至る。狹き故、隣寺に行き居る。此所にて町人等居る。御經終り方、栗原等挨拶に出て御勝手に引き候様云う。予、平

右衛門、七左衛門、万兵衛、恵十郎、近江屋善兵衛、堺仁兵衛等、源空寺へ参り、浅草観音へ参り、万年屋にて中食。予、直ちに帰宅。七左衛門此所より内へ帰る。

二五日

予出勤。平右衛門、万兵衛來たる。泊まり居る。佐右衛門は昼帰国。夕頃保木來たる。今日十七日故、焼香に参り申すべきかを、保木、渡辺に談じ約束す。

二六日

七時頃養純、保木來たる。渡辺に談じ候所、來たるに及不レ申由。今夜万兵衛、明日出立の由にて暇乞いして行徳川岸へ行く。

二七日

今朝予出勤。七左衛門同道。高橋侯に行き七左衛門御目通りして、予に暇乞いして昼立帰國の由。

二八日

桑原養純來たる。

二九日

予足立へ行き星調べ。高橋侯御全快出勤。大川治兵衛、平右衛門、願書を下河辺に渡す。

三〇日

予出勤。足立重太郎へ金壺兩上げる。右は針の礼。帰り大川治兵衛同道帰る。下河辺を以て大川治兵衛罷出候様、高橋侯云故に、大川、高橋侯へ行く。癒止故明朝來たり候様、故に予と一緒になる。

十月 小

朔 日 予出勤。今朝大川治兵衛、高橋侯に出、存意申上げる。右は予、

此度伯母死去に付、桑原御屋敷の御恩召、早々引き払う様にとの事故、在所へ引き、折々、稽古に罷出候様、明日平右衛門罷出候様との御意。

二 日 平右衛門、高橋侯へ行く。存意等申上げる。高橋侯、治兵衛來

たり。右量見に相決めべきかと云。平右衛門御答。下河辺より又申上候べしと云う。

四 日 予、加納屋、平右衛門同道、二丁目若叶屋に行く。下河辺、同

人娘待ち合わせ、勘座芝居見物、五時頃帰宅。伊能帶刀着。

六 日 予出勤。平右衛門、治兵衛、下河辺へ高橋侯へ申上候通り相決めたき由にて、帶刀列席にて申上げる。下河辺、今夜泊まり、明朝早々帰り申上げる。

七 日

今朝四ツ時前、予、加納屋、平右衛門、彦次郎召連れ同道二丁目若叶屋に行く。永井待ち合わせ、芝居へ行き見物す。

八 日

今朝平右衛門、下河辺へ行き、昨日帶刀申上候通り相成り候は、私共三人列席にて申し上げ候事、相談行き届かぬ様に恐入候と申す。下河辺、高橋侯に行く。帶刀、高橋侯へ行き存意申上候。今夜平右衛門外に泊まる。帶刀帰り云う。高橋侯下り候を御惜しみの様子故、私挨拶に困り、御願にては御座候は、私共在所方へは御下り切りの様に云う上は、江戸住居年に三十日ずつも云通りに下り候様申上げ候由。加納屋、平右衛門、予、列席にて云う。平右衛門云う通り高橋侯へ申上げる。先生云う。帶刀かく云う上は、猶々早々帰國の方可然由。

九 日

予出勤。早朝行く。高橋侯少し御不快の由。御目通り之有て、

予存意御聞有て、色々在所、又、帶刀先日申上候お話有る。予、御二階より絵図板一枚、御役所へ持參。重太郎と相談。絵図板少しこそき故。予八時頃帰宅。明日、九尺の板持參するつもり。

右は星図取りかかり。養純來たる。今夜帶刀外へ泊まる。

一〇日

雨故、九尺板持參なり兼休み。

一一日

予出勤。九尺板持參。重太郎と水張り、外の白野等引く。暮頃帰宅。榎本源三郎（注7）來たる。國元の弟死去の由。

一二日

予出勤。重太郎と白野一応野を引く。暮六時帰宅。

一三日

昼頃治兵衛、平右衛門、予同道、源空寺及び観音へ。飯相食。

一四日

予出勤。白野使い損じ新たに始める。寺沢善藏來たる。

一五日 夜勝三郎來たる。引込みの儀を話す。

一七日 横本源三郎來たり。予、今夜八ツ時頃迄星測。

一八日 予、治兵衛、平右衛門、帶刀、買ひ物に出る。今夜、予、治兵

衛、五半時頃金星測。

一九日 予出勤。今夕、豊田、重太郎家見に來たる。

二〇日 予出勤。重太郎と朱線引き出来る。

二一日 伊能平右衛門星立。行徳川岸に行く。時に出船無し之故帰る。

二二日 夕頃、又、行徳川岸へ下り明朝出船。

二三日 荷物を清兵衛船に積む。五十一番。今夜八ツ時過星測。但し、

横本源三郎來たり泊まる。

二四日 善兵衛船着。家見來たる。解家屋來たる。今夜横本來り九ツ時

頃迄星測。下河辺略曆持參。但し、白野は先達而、予持ち帰る。

二五日 只今、墨十八枚。

二六日 予出勤。星岡突き始める。高橋侯より桜墨の御説え有レ之。

二七日 象限儀、子午線儀取り払う。

二八日 予出勤。今夜久兵衛登り來たる。佐原大騒動の様子を聞く。質

屋一軒、本宿地頭不承知にて大勢ときの声にて本家宅參り、四

ヶ村の内、最後に様々引取候由。尤、名主共退役願いして出府

いたし候。

二九日 善兵衛、船へ荷物を積ます。四十八番。

二八日 予出勤。

二七日 善兵衛、船へ荷物を積ます。四十八番。

注釈

注1 伯母（忠敬の長女穂）

・伊能忠敬長女死去の記（「伊能忠誨日記」伊能忠敬記念館所蔵）

文政五年八月一四日付

長嶋村（現佐原市長島）の人。

注2 浦野五助

諱は元周。西丸御裏御門番之頭男谷彦四郎組同心で、高橋景保の手附出役。シーボルト事件に關係して「押込」となる。

注3 嘉兵衛

廿四日

晴天

（つづく）

伊能忠敬・景敬死去後、祖父忠敬の後をついで天文暦学の道に進もうと、高橋景保のもとで学問に励んでいた忠誨を親身になつて世話をした妙薫。

妙薫は、文政五年八月一四日の五ツ半時に江戸亀嶋町の忠誨宅で、六〇歳の生涯を閉じた。「忠誨日記」に、「伯母、灸すえに行く」と、初めて記述されているのは、文政四年一一月二一日で、文政五年に入ると、このような記述が頻繁に見られる。この頃から妙薫の体に異変が起きていたのである。青地林宗、足立長嵩などの名医の診察治療を受けていたが、同八月一一日の条に「今度は大病故、引きして看病をしなさい」と、侍医にいわれたという記述がある。

忠誨は、八月二四日に、江戸砂村で妙薫を荼毘に付して、二五日に深川の法乗院で葬儀を行なつた。そして九月一日に妙薫の骨を持ち江戸亀嶋町宅を出立し、二日の夜四ツ時過、佐原宅に帰着した。

佐原では、親族や奉公人、橋本町内の人々などが悔みに来宅する。翌九月三日、佐原村の観福寺の伊能三郎右衛門家の墓地に、妙薫の骨を葬る。戒名は「楞嚴院躰常妙実大姉」という。享年六〇歳。

注4 油屋四郎兵衛

伊能家と同じ町内（現佐原市本橋元）の人。「伊能忠敬測量日記」の寛政二年一〇月九日（第一次蝦夷地測量の帰路）の条に、忠敬が四郎兵衛家の先祖慎方の墓（現宮城県岩沼市）立寄ったという記述がある。

慎方の娘に伊能三郎右衛門家の親族である成田市磯部の桧垣氏より孚充が婿養子に入る。孚充の子が、江戸時代後期の国学者で歌人であった伊能穎則（一八〇六～一八七七）である。

注5 箸し可井のパパ（橋替のパパ）

橋替（現佐原市橋替）のパパの身元は不明である。忠誨の乳母ではないらしい。伊能家で慶弔事があると必ず来て一泊して帰る。

「忠誨日記」によると、次の日に来て一泊している。

年始 文政七年一月一日 文政八年一月一〇日

忠誨の節句 文政八年五月二十五日

稻の葬儀 文政五年九月三日

忠誨が佐原宅へ住むようになった日 文政九年三月一六日

忠誨の長女が出生した時 文政九年六月一二日

年末 文政六年一一月二九日 文政八年一〇月二十五日

注6 永沢吉郎兵衛、金田平左衛門、近江屋長四郎、石屋三郎兵衛、奈良屋治右衛門、佐原村の人。

注7 檻本源三郎（箱田左太夫）

榎本は、箱田左太夫の榎本家へ入籍後の姓である。箱田左太夫は、寛政二年（一七九〇）に備後国箱田村で、箱田園右衛門直知の二男として生まれ、諱を真与、通称を良助、左太夫、源三郎といい、忠敬に師事し測量術を学び、第七次より十次迄の測量に参加。文政五年頃、榎本氏を継ぎ、円兵衛と称した。従つて「忠誨日記」の文政

五年八月二十五日の条には箱田左太夫と記し、同年十月一日の条では榎本源三郎、文政九年一月一四日には榎本円兵衛と記述してある。

榎本武揚は、源三郎（左太夫）の二男である。

訂正

前号・伊能忠誨日記（五）の58頁「先触・伊能三郎右衛門差出の文書」で「御定之沈賃錢請取之」の「沈」を抹消いたします。

新潟支部だより 「新潟フロア展」に向けて活動開始

7月30日11月下旬に開催予定の「フロア展」について第一回打合会を開き、広報活動、協力体制、講演会の内容など協議しました。事務局が小林支部長のご配慮により下記に設置されました。

T 95010088 新潟市万代2-1-11 コズミックビル4F

伊能忠敬研究会新潟支部事務局（担当・浦井さん）

T E L 025-1249-15513

F A X 025-1249-17713

三条市にお住まいの山浦さんは7月13日の集中豪雨で床上浸水の被害を受けました。ご主人と二階で救助を受けついていたが舟が少なく自衛隊の助け舟は翌朝14日でした。五日間の避難生活から戻ったが、いまだに一階はこわれたままで、不安定な生活が続いているようです。一同の励ます会で元気をいくらかとり戻されたようでした。

後列左から垣見、石川、石橋、前列山岸、小林、小野、山浦のみなさん（垣見社）



九州支部だより

佐世保、島原の忠敬測量 中富道利

六月十九日、九州支部春季例会がさざんびあ博多で開催された。島原から松尾卓会員、佐世保から平川会員、佐賀から松尾紀会員ら遠来の出席を含め十三名の出席であった。石川支部長から、本部関係報告、九州支部報告、新会員の紹介があり講演に移つた。

まず、最初に会員の平川定美氏（佐世保史談会事務局長）の「佐世保と伊能忠敬」の講演があつた。

平戸領であつた佐世保地区の測量について永年にわたり研究され、測量日記を熟読、文献をあたり実地に調査された膨大な資料をもとにまとめられた結果の発表である。佐世保地区の測量に約四十日をかけ、九十九島のほとんどの島をたんねんに測量しているとのことである。



後列=井上、穂吉、中富、松尾紀、河島、山下、野田
前列=熊谷、村井、石川、松尾卓、平川のみなさん



次に会員の松尾卓次氏（島原城資料館専門）の「島原・天草の下絵について」。

発見された島原市街の下絵について、実地に調査の上、島原市街の復元図を作成され、天草の龜絵についても、天草（富岡町中心）と一致することを調査の上確認された。島原の測量については寛政四年の雲仙の噴火（島原大変）後に出来た新しい島を詳細に測量していることが発表された。更に「豊州御領測

量方御慶一件」により、島原藩が九州一次測

量での飛地豊後領の測量を参考にして対応していたことを発表された。

村井会員から母校飯塚市幸袋中学校の位置測定をし、モニユメントを設置したとの報告があった。わが国の地理学的位置が世界座標系に統合され、その基準のもとに測定されたものであるが、世界座標系では日本全体の位置が約四五〇度北西に偏位することになったとのこと。測量に素人の私には基準が変わったことはわかるが、あまりびんとこないし、なぜもつと早く変更出来なかつたかなと思つたりもした。いずれにしても制度、基準を変えることは、関係者にとつては大変なことだと思う。村井会員は平成十三年九月小倉・常盤橋たもとに「伊能忠敬測量二百年記念碑」建立に建設委員長として尽力されている。

石川支部長から十一月福岡で開かれる「アメリカ伊能大図フロア展」の概要説明と協力要請があり、会員から遠方の会員のため自宅に二、三人の宿泊可能との申し出もあった。日本地図センターの伊能大図チラシを見て、ぜひ大図を手にしたいが懐との相談との声もあつた。その後場所を変えて懇親会を開き、例会に劣らぬ盛り上がりであった。
(福岡県遠賀町・なかとみみちとし)

日々の話題から

□ 塩の道ウォーク 糸魚川まで430キロの古道を踏破！

伊能ウォーク番外編その四

太平洋を望む静岡県相良町を4月17日に出発、静岡、長野、新潟の三県をまたぎ6月6日まで16日間をかけ、先人をしのびながら糸魚川を目指した。大内惣之丞さんが総隊長をつとめ中山翠さんなど伊能ウォークの顔見知りが多数参加して全行程を踏破した。（新潟日報）

□ 松陰、道灌、忠敬、林蔵……歴史を動かした「開拓者」子孫

ヨミウリワイヤークリー 6月13日号

「祖母は忠敬の遺品がいかに大切なものを分かつた。偉かつたのは、88歳で亡くなるまで、忠敬の地図を散逸させなかつたことです」とは伊能洋さん。その遺志は、妻・陽子さんへと引き継がれている。忠敬の魅力とは。渡辺一郎さんは「忠敬は凝り性なんです。自腹を切つてでもやりたいことを徹底的にやる。そこに魅力がある」。

「北に残る一マミヤーの謎」では伊能忠敬から測量術を学んだのが探検家の間宮林蔵。林蔵から数えて8代目の当主間宮正孝さんを紹介。

□ 伊能忠敬の石像が建立 伊能忠敬記念館敷地に

白鳥石材の白鳥富士男氏より6月佐原市に寄贈された。旧宅敷地に立つ西俊夫氏制作の銅像を参考に白鳥氏が製作したもの。台込みの高さ2メートル、本体の高さ1.75メートル、奥行き幅72センチの白御影石製。

□ 道東旅行のお便りから 本郷靖枝さん『記念柱の除幕、大図展の開幕式典など貴重な場に参加できた事は大変うれしいことでした。それにしても二〇〇年もの昔、彼の地を歩測した事に思いを馳る時、いかほどの苦労であったらうと思います。又忠敬先生の偉業が今の時代に確実に引き継がれている事に感動でした。』 成瀬淑子さん『野付半島とどちら散策、霧多付岬周遊、釧路湿原散策、緑の広原に群がる動物たち等大自然に囲まれた心豊かな旅をする事ができました。広大な大自然の中での記念柱建立式や大図フロアー展で忠敬の偉業、迫力を肌で感じました。』

お知らせ

□ 事務所が移転しました。目黒区青葉台の「日本地図センター」二階です。日本地図センターは財團法人組織で国土地理院刊行の地図や空中写真、数値地図等の複製、頒布と地図に関する調査研究活動を行っています。現在全国展開のアメリカ大図展では中核の主催団体です。

T-153-10042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

TEL・FAX 03-3466-19752

JR渋谷から東急田園都市線（地下鉄半蔵門線直通）で一駅「池尻大橋」下車、北口出口から徒歩7分。バスでは渋谷西口バスター・ミナルから三軒茶屋、二子玉川、大井町方面の各路線「大坂上」下車3分。

6階建の大きなビルです。正面からエレベーターないし階段で二階へお上がり下さい。右手に「伊能忠敬研究会」の表札が部屋にかけてあります。最近、地図センター所有の県別地名事典、地籍調査資料、各種地図関連図書などが一般公開されました。これらの図書をゆっくり閲覧できる設備が整っています。また、諸会議、打合せ、懇談などのスペースの利用が可能。是非一度お越しをお待ちしております。

□ 『別冊「伊能忠敬研究」伊能忠敬未公開書簡集』は11月の発行。また次号38号会報は創立10周年記念号を予定しています。

□ 創立10周年記念大会は12月12日（日）、会場は東京・世田谷の日大文理学部を予定しています。詳細は追ってお知らせいたします。

□ 渡辺さん「三六日で世界一周」伊能洋さん「忠敬を詠む」は紙面都合により順延させていただきました。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどうなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

第38号締切 9月末 発行 11月

②例会・見学会の開催

第39号締切 12月末 発行 2月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第40号締切 3月末 発行 5月

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号を明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

(注) (04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました)

T153-10042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax 03-3466-19752

郵便振替口座 ○○一五〇一六一〇七二八六一〇

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2~8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、パソコンなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行(400字詰用紙4枚分)、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用しています。タイトルは5行分、写真、図表等(返却します)添付可。

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。任理事の担当です。それそれがリンクしています。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それそれがリンクしています。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

編集後記

7月27日夕方、ラジオの地震情報。別海町!震度3と聞いてほつ。今年の猛暑では野付風連道立自然公園の空気がそのままほしい。その節は地元皆さんにたいへんお世話になりました。誌上から厚くお礼申上げます◇事務所の移転が急遽決まる。7月22日日本地図センターを訪問し決定。渡辺代表の実績、伊能ご夫妻のご尽力に大家さんの地図センター野々村理事長のお計らいに感謝し、渡辺ご夫妻の飯田橋10年に御いたします◇<http://www.asahi.com/column/eis/>、「駿河地理学」を是非ご覧を。「忠敬に酔う」「ますますお近づきに」「客足予測大はずれ」野々村さん岩城さんとも木曜日です◇献上鮓の時期になります。まず申込みを。味わうのは11月下旬以降です◇釧路大図展の東京版ベタ記事。欠図発見で代表の談話部分。長年のお付き合いの記者さんたちから最大のエールでしょう◇8月4日新事務所の歓迎の集いが。地図センターのみなさんや国際地図学会ともお隣に。野々村さんから渡辺さんに「ジャックと豆の木」が渡りました。大事に育ててまいります(F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.37 2004



HOT NEWS

- Inoh Survey Memorial Pillar was Set on Bekkai Hokkaido
The 214 Large-scale Inoh Maps were Exhibited in Kushiro
3Hot Days in Kushiro
The Inoh Tadataka Society Study Tour to Nishibetsu
The Last 4 Large-scale Inoh Maps were Caught
Last 4 Inoh Maps Disclose

TOPICS

- Tadataka in Foreign Literature (2)
Takao Kashiwagi wrote Lyrics for Junior-high in Sawara
Tadataka's Medicine for Ague
Jun Ihoh Got Dark-blue Ribbon Medal
FROM VISITORS' RESISTERS

MATERIALS

- Reading Documents in "Seimonkinkyoruiroku"(4)
Tadataka was a Man of Character
Introduction of Valuable Letter in Tadataka (2)
Kagesuke's family and the Shibukawas

REGIONAL MATERIALS

- Map from Shinagawa to the Rokugo River
Inoh Tadanori Diary (6)

BRANCH REPORT

- Niigata Branch : Acution Begun to Inoh Maps Floor
Kyushu Branch : Inoh Surver on Sasebo and Shimabara
DAIRY TOPICS OF THE OFFICE
Stone Statue of Tadataka was Built in Sawara

Editorial Department	1
Editorial Department	7
Maeda Koko	9
Sinzawa Yoshihiro	12
Watanabe Ichiro	14
Fukuda Hiroyuki	16
Akima Minoru	20
Editorial Department	23
Ohnuma Akira	45
Inoh Tateo	46
Inoh Yoko	48
Kojima Kazuhito	24
Sakuma Tatuo	30
Andoh Yukiko	35
Itoh Eiko	40
Ueda Kouichi	48
Sakuma Tatuo	56
Kakimi Souichi	62
Nakatomi Michitoshi	63
Editorial Department	64
Inoh Memorial Museum	64

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY